

熊本洋学校三級生<sup>(期)</sup> 坂上竹松<sup>さかのうえたけまつ</sup>

—貴重遺品と洋学校教育—

目次

- 一 福沢諭吉訳書の原本—序に代えて
- 二 「坂上資料」  
資料の出現  
資料のリスト
- 三 稀<sup>きこう</sup>観書 (No. 1 ～ 11・16・17)
- 四 坂上家
- 五 竹松の洋学校入撰  
竹松  
入学志願  
成績
- 六 竹松の履修科目—カリキュラム—  
「履修證」

竹内力雄

年次別履修科目

七 カリキュラム先行研究等

- 1 昭和40年 『バンド研究』
- 2 昭和50年 『隈本古城史』  
くまもとふるしろ
- 3 昭和60年 『熊本英学史』
- 4 『海老名弾正先生』(参考)  
海老名の年次別履修科目

八 竹松の学習

英文数学ノート

- 5 卒業證書の科目―一級生・余田と二級生・下村―(参考)
  - 1 原本不詳ノート (No. 31・32・40・41)
  - 2 原本判明ノート (No. 34・35・36・37・38)
- 英単語帳 (No. 42・43) と教科書

九 中西牛郎と竹松

- 竹松自筆履歴書  
中西牛郎と神水義塾  
くわみず  
中西と同志社・天理教

十 おわりに

## 一 福沢諭吉訳書の原本―序に代えて

平成15年6月、熊本洋学校（以後 洋学校と略）教師館（ジエーンズ邸）にて一冊の英書を披閲する機会があった。驚いたのは、福沢諭吉の『雷銃操法』の訳出原本である。この書は、英国の当時の制式銃である先込のエンフィールド・ライフル（Enfield rifle）と、これを元込に改造したエンフィールド・スナイドル（スナイドルはこの式の元込銃を発明した Jacob Snider に由来）の操法に関するものである。福沢はライフル（施条）銃を「雷銃」と訳したのである（但 蘭語 donder Ⅱ 雷に由来する「雷銃」ドンドル銃Ⅱラツパ銃とは全く異つてゐるし また 乳頭状の雷管に着火薬・ドンドルを用いた「雷銃」でもない）。

その翻訳の経緯は『福澤全集』（明治31年版）<sup>一八九八</sup>卷一「諸言」で福沢自身が語っている。「時勢の必要に投じて発売の数、幾万なるを知らず」と記述しているように、幕末から明治の初めにかけて大いに需要があつた翻訳書ではあつたが、そのテキストは永らく不明であつた（『福

澤諭吉年鑑』34 '07年 拙論参照）。

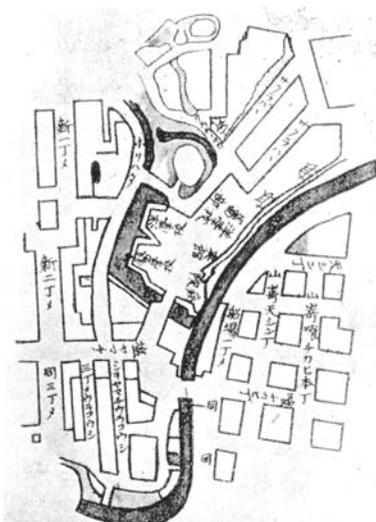
この英書の旧蔵者が洋学校三級生（第三期入学生 当時の呼称に従つて三級生とする）・坂上竹松（以後 竹松と略）である。洋学校の場所を示しておく（次頁）。

西側に洋学校、医学校、東側に洋学校属部、夷館、病院とあり、医学校の南に塩ヤマチとある。

この英書の裏表紙には「bad book」と墨書してある。



「INSTRUCTION OF MUSKETRY」  
の裏表紙（資料番号No.2）



明治初年の古城略図  
（『五高五十年史』昭和14年 p.60）

他の書込みから明治7年6月21日、上図の塩ヤマチ（昭和40年 新町二丁目となり町名消滅）で購入、という事が判明している。竹松十三歳の時である。購入書店の特定には至る事はできなかった。この書が「坂上竹松関係資料」（以後「坂上資料」と略）の一点としてジェーンズ邸に収蔵されていたのである。

「坂上資料」が『熊本バンド研究』（昭和40年 同志社大学人文科学研究所編 みすず書房 以後『バンド研究』と略）より早く世に出て利用されていたら、この書での教育課程（履修課程 カリキュラム）の解明は、さらに詳細な展開となった、と推察されるのである。

「竹松資料」は、花立三郎（熊本大学文学部教授）「熊本洋学校」「隈本古城史」pp.419～471で洋学校生徒の「キリスト教への入信」を論考する中で紹介されている。即ち、中国版『新約全書』及び、日本語版『真神教晩』の扉各一点と「英文数学ノート」見開きにして二ヶ所が画像で紹介されている（p.460 但 この時点では資料は熊本県立第一高等学校 以後 県立第一高校と略 蔵）。竹松は基督教に関心は高かったが入信はしていない。

その後、<sup>平成25</sup>13年4月、石井容子<sup>まこ</sup>『熊本洋学校教師 Capt. I.L. James 研究—足跡と功績』でも「坂上資料」の一部が利用されている。

## 二 「坂上資料」

### 資料の出現

県立第一高校社研クラブ研究誌・『峠』第六号（昭和38年度）に、同校社会科教諭・三島彦介氏の記事として、その詳細がある（『隈本古城史』 pp.714～716に再録）。

昭和三十八年秋十月本校の創立六十周年記念の文化祭に社研クラブは洋学校関係の写真をならべた。ちようど石川たか先生と私が展示室にいたとき、三の十の坂上征さん<sup>③</sup>が、家にも祖父が洋学校の生徒だったのでいろいろその時代の本やノート、写真などがある、と話しをしてくれた。是非一度見たいと言った所、数日して白川新聞付録やジエーンズの写真、英語による数学を毛筆で写したノートなどをもつてきた。石川先生も私も驚いた。早速、畑本先生、野口先生の所へ、私がついていった。洋学校生徒の学生時代のノートは私も初めてだったし、畑本先生も初めてだった。和紙にも毛筆で英文による数学をきれいに書いてある帳面には私達みな感激した。明治維新当時の若人の西洋文化摂取の情熱に心をうたれた。九十年前、本校の二段地古城で、勉強に励んだ若人の息吹がそのままよみがえってくるようだった。

——（中略）——

十月下旬の月曜日、私は畑本先生と坂上征さん（の）お家を上益城郡の土山に訪ねた。立派な文化遺産を九十年も保存して下さったことが嬉しかったからである。そしていろいろその他のものを見せていただいた上、学校の方にお望みでしたら寄贈しましょうというお言葉だった。益々私たち二人は感激して帰った。

十一月下旬の連休の二日目、三の十担任の向井先生と私たち三人は再度土山にお伺いして、目録にあるような五十四点

(そのときは五十二点だったがあとから二点ふえた。)をおあづかりして帰った。

早速校長先生にお見せした。大したものだ、大したものだ、校長先生も感心された。そして英語で書いた数学の帳面をペラペラと読んでほん訳されたのには驚いた。「私も学生時代は原書で勉強しました。そのうちにケースを作つて大切に保存しましょう。生徒たちの参考にも供しましょう。」と言われた。

現在、現物は図書館においてある。学校でこのようなものの整理と管理は、普通図書館がしている。私が図書部の資料整理係なので、とくに完全にしたいと思つている。

熊本洋学校の歴史のことは、詳しくは日本歴史専攻の立場で畑本先生が書かれることと思うので、ここでは何も書かない。洋学校関係の資料の寄贈をうけたいきさつを簡単に述べただけである。とくに坂上征さんのお母様の坂上ヨシ子さんの絶大な御好意のもとに寄贈がなされたことを深く感謝している。

——(後略)—— (一峠) 第六号。

右の如く、昭和38年度に五四点、同40年度に十一點、計六五點が坂上家から県立第一高校に寄贈され、その後、熊本市所管のジェーンズ邸に寄託(年月及び経緯不詳)。平成12年3月末に、この高校から熊本市へ寄託から寄贈となつている。この間、いつの時点かは定かでないが貴重な資料五點が所在不明のまま、熊本市蔵となつて今日に至つている。

## 資料のリスト

坂上家から県立第一高校に寄贈、その後、熊本市蔵となつた竹松の遺品等のリストである。

番号 (No.)	資料名	大きさ (たて×よこ cm)	頁数	著者等	出版年
1	HOLY BIBLE	14.3 × 10.3	152		1867
2	Musketry Instruction of the Army	18.5 × 12.0	105		1867
3	A Practical Arithmetic	18.4 × 11.8	336	G. P. Quackenbos	1867
4	The Gospel According to Saint Mark	11.0 × 8.0	120		1869
5	The Gospel According to Saint John	14.7 × 11.3	199		1873
6	Representative Government	19.0 × 12.5	47	Herbert Spencer	明治18
7	The Elementary Spelling	17.5 × 10.0	158	N. Webster	1866
8	The Peep of Day	15.0 × 10.0	205		
9		一 菊版	58丁		
10	真神教曉	二 菊版	56丁	カロザス	明治6
11		三 菊版	59丁		
12	論語 (巻の一、巻の二)	16.0 × 11.0	45丁	(朱喜集註序説)	
13	大日本地理箋	菊版半載	96丁	(山口屋藤兵衛他)	〃 7
14	新選幼学便覧	11.0 × 15.5	63丁	内田高長	〃 11
15	小学教授書	菊版変		(豊前屋太平他)	
16	新約全書 (中国語)	8.4 × 14.7	384		1864
17	新約全書 (日本語)	14.3 × 10.0	758		明治18
18	算題一	美濃判紙四ツ折	33丁+2		弘化2(11月)
19	算題三	美濃判紙四ツ折	18〃+2		弘化2(12月)
20	算題	美濃判紙四ツ折	34〃+2		弘化2(5月)
21	算題	美濃判紙二ツ折	20〃+2		弘化4(8月)
22	算題	美濃判紙四ツ折	27〃+1		弘化4(11月)
23	算数二	美濃判紙四ツ折	36〃+2		弘化?
24	算数	美濃判紙二ツ折	16〃+2	竹松の父・右伝 (惣次郎)	弘化?
25	九章解天	美濃判紙四ツ折	38〃+2	算術帳面 (墨書)	弘化4(1月)
26	九章解	美濃判紙二ツ折	13〃		弘化3(3月)
27	函解	美濃判紙四ツ折	20〃+2		弘化?
28	算術訓道記	美濃判紙二ツ折	12〃+1		弘化3(10月)
29	(算術)	美濃判紙二ツ折	7〃		弘化?
30	(算術)	美濃判紙二ツ折	11〃		弘化?
31	Fractions and United States Money	美濃判紙四ツ折	83丁		
32	Denominate Numbers	美濃判紙四ツ折	92丁		
33	算数を英語で書いたもの	(欠)			
34	Definition of Mensuration of Surfaces and Solid	美濃判紙四ツ折	16丁		
35	Application of Geometry Mensuration of Surfaces	美濃判紙四ツ折	42丁		
36	立方術 Mensuration of Solidity	美濃判紙四ツ折	45丁		
37	測量三角術 Trigonometry	美濃判紙四ツ折	150丁	竹松筆写ノート類(墨書)	
38	Elementary Algebra	美濃判紙四ツ折	82丁		
39	Problem……	(欠)			
40	Notes for The Rule for The Fraction	美濃判紙四ツ折	13丁		
41	28A Merchant Failing	美濃判紙四ツ折	32丁		
42	英単語帳	美濃判紙四ツ折			
43	英単語帳	美濃判紙四ツ折			
44	世界国書三	美濃判紙二ツ折	22丁+2		明治5(2月)
45	世界国書五	美濃判紙二ツ折	12〃+2		〃 5(2月)
46	腰懸状	美濃判紙二ツ折	7〃+2	竹松写本	〃 3(11月)
47	歴史綱鑑 Notes	美濃判紙二ツ折	11〃+2		〃 10
48	熊本城籠城記	半紙二ツ折	10〃+1		〃 11(5月)
49	拓心義塾規則	半紙二ツ折	7〃+2		〃 20(3月)
50	雑記帳	7.8 × 19.3	55〃	竹松?	〃 10(12月) 〃 11(2月)
51	白川新聞第37号付録洋学校生徒席順表	41.6 × 28.5			〃 8
52	ジェーンズ写真(名刺型上半身)	(欠)			
53	ジェーンズ写真(名刺型顔中心)	(欠)			
54	坂上竹松の氏子証明の札(木製・手札型)	(欠)			明治6
55	坂上竹松文字綴他前半卒業証	16.5 × 23.1			〃 6.12.22
56	坂上竹松綴り書他第一周年後半卒業科目試験證	16.5 × 23.1			〃 7. 7.24
57	坂上竹松第二周前半卒業証	16.4 × 23.2			〃 7.12.26
58	坂上竹松第二周後半卒業試験之證	16.5 × 22.8			〃 8. 7.25
59	坂上竹松第三周前半卒業之證	16.5 × 23.4			〃 8.12.29
60	坂上竹松第三周後半卒業之證	16.5 × 23.3			〃 9. 7.31
61	坂上竹松小学校教授依頼並びに給与辞令書	24.4 × 31.3			〃 20. 9. 9
62	坂上竹松依頼職脱辞令書	19.5 × 27.1			〃 21. 4.28
63	坂上竹松小学校授業嘱託並びに給与辞令書	20.3 × 28.3			〃 21. 8.30
64	坂上竹松給与辞令書	20.6 × 28.3		(本文参照)	〃 22. 4. 1
65	坂上竹松辞令書下付通知書並びに辞令書	(封筒) 23.8 × 9.2 (通知書) 24.6 × 14 (辞令書) 20.7 × 28.5			〃 28. 5. 9

註 (欠)はジェーンズ邸に収納されていない。No.55以下は昭和40年度寄贈。この表は三島彦介氏作成リストとジェーンズ邸収蔵品リストに基づいて作成。美濃判紙四ツ折は大略16×21前後である。No.2と3はtwelvemo(十二折)の大きさと思われる。

### 三 稀観書 (No. 15・11・16・17)

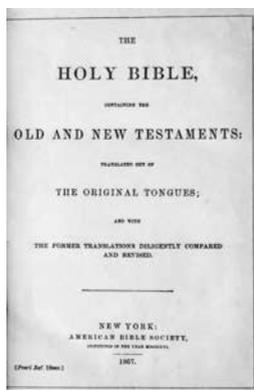
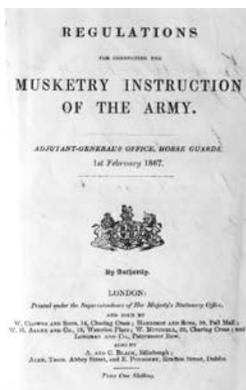
「坂上資料」の中で竹松が洋学校在学中の座右の書を中心に、日本には殆ど現存しない稀な書を「資料リスト」No.に従って紹介しておく。書誌的要素は先述のリストにも記載済みである(使用画像で特記のないものは熊本市文化振興課提供)。

#### No. 1 (扉)

米国聖書協会版は日本では他に一本は知られている。同年刊のOxford University Press版は二本は知られている。左下に十八折(18mo)とサイズが判る。

#### No. 2 (扉)

「(英国)陸軍小銃操法教則」といべき類のもので陸軍総司令部副官部局編。印刷は政府刊行物出版局である。定価の一シリングは、当時の為替相場で二十銭ほどである。福沢諭吉は幕末、三・四ないし四・四倍くらいの高値でこの古本を、それでも安く入手できたとして、『雷銃操法』を訳出、出版、大いに売れたのである(先述「緒言」)。竹松は十七セントで購入した、と記している(定価より廉かったようである)。



筆者は、その挿絵から『雷銃操法』の訳出原書と判ったのである（数頁の欠落があり、大英図書館にそれを補うべく直ちに、複写申込したが二年後に補う事ができ、ジェーンズ邸へも届けておいた）。

### No. 3 (扉)

日本に他に四本は現存。京都大学には二本。附属図書館蔵の一本は京都帝国大学設置（明治31年6月18日、勅令による）の際、東京帝国大学から除籍移管にされたものである事が中扉の押印から判明する。興味深い一本である。

著者：カッケンボス (George Rayns Quackenbos 1826-1881) はニューヨー

ク生れの教育家・教科書著作者として知られてゐる。彼の著 *A Natural History: embracing the most recent discoveries in the various branches of physics.* New York, D. Appleton & Co., 1859. は「カッケンボスの窮理書」として明治初期に、慶応義塾、大学南校等、多くの学校で窮理学（初歩物理学・自然科学）や英語の教科書として大いに使われていた事はよく知られている。福沢諭吉は『訓蒙窮理図解』を著す際に、この書を参考にした事もまた、よく知られている。

洋学校での算術の教科書は後述の如く、Rayの著作であるから、竹松は自学用にこのカッケンボスの算術書を購入したのである。坂上家にはそれだけの余裕があった事になる。日本に数本しかない本書が竹松遺品として熊本に現存するのは奇といふべきか。

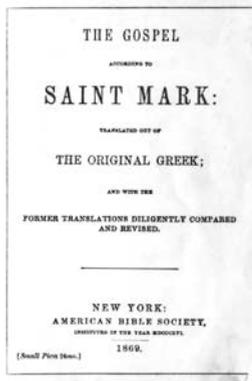
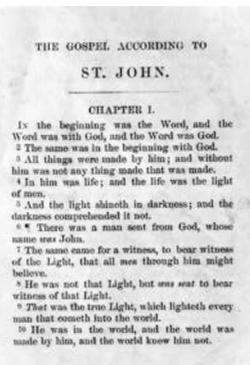
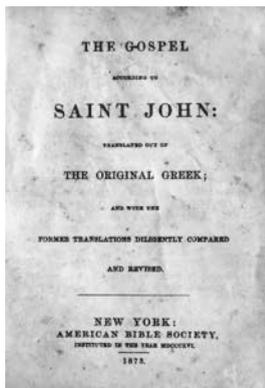


### No. 4 (扉)

私見では日本に現存するのはこの一本のみである。稀観書中の稀観書というべきか。表紙はロイヤルブルーの布目紙にゴシック体で「Gospel of St. Mark」と金色文字がプレス印刷してある。最終頁には鉛筆で「竹松」とサインがしてある。二十四折紙(24mo.)にスモール・パイカ(二インチに十一文字)、一二〇頁の小品である。

### No. 5 (扉他)

No. 4より少しサイズは大。表紙の色はNo. 4と同じ。見開にして左頁にはロマ字での和訳、右頁は英文。全一九九頁。日本には他に三本は現存する。裏表紙ウラには「To. Mr. Sakanoji」とペン書きの呈辞がある。ジェーンズによるもの、と推定される。



No. 6 (表紙題簽。表紙は紺色)

扉は下図の題簽の下に From Essays Moral, Political and Esthetic. Tokio. Rikugokuwan, book seller. 1885. と続く。

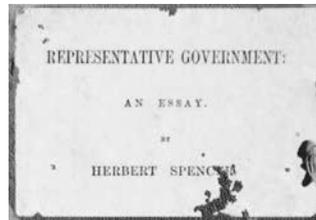
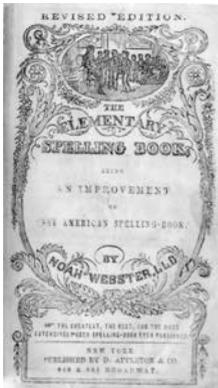
スペンサーの翻刻「代議政体論」で明治18年刊(四七頁)である。翻刻は早くも、紀元二五三八年(西暦一八七八年・明治11年)に東京大学から出ている(山下重一「明治初期におけるスペンサーの受容」『日本における政治思想』76年 日本政治学会編 岩波書店)。

東京大学版は十本以上の現存が知られている。竹松旧蔵の Rikugokuwan (六合館) 版は、私見では京都大学に一本現存するのみである。昭和<sup>一九三五</sup>10年、東京の「Daito Shobo」からも翻刻出版されている(二本は現存する)。

竹松の、この書の旧蔵は彼の政治に対する指向が垣間見えるようである。また、大江義塾での徳富猪一郎の言説の影響があるのではないかとしておきたい(山下重一「徳富蘇峰とトクヴィル、スペンサー」『英学史研究』第十五号 '82年 日本英学史学会)。

No. 7 (扉)

ウェブスターの「スペリングブック」として知られたもので、十九〜二十世紀初期にかけ、米国だけで七五〇万部売れたとされている。この竹松旧蔵本の「序文」には一八六六年の年紀がある。米国出版のオリジナル本(日本では多くは翻刻出版)は日本に数部現存するようであるが、竹松旧



蔵本より古いものは未見のようである。珍らしいものがよくぞ遺つて、ゆかりの場所に収つたものである。

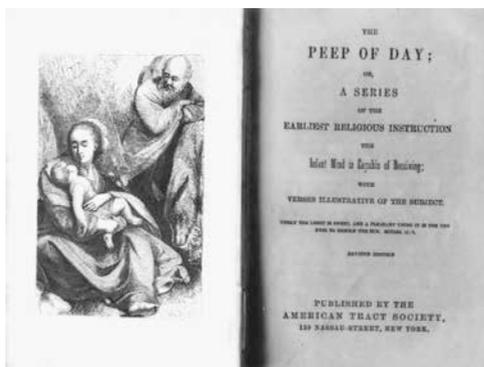
### No. 8 (表紙ウラと扉)

この書は子供向けの本の作者である英国婦人・Fvell Lee Mortimer (1820-1878) が一八三六年に旧姓・Bevan の名で処女作として出版。小さな子に基督教を教え込むのに最もよい手段としての、聖書に基づくお話し、と云ふべき書といわれている。全五十三レッスン。その Lesson 1. は、

OF THE BODY. My dear children :—You have seen the sun in the sky. Who puts the sun in the sky?—God. Can you reach up so high?—No. Who holds up the sun that it does not fall?—It is God. God lives in heaven; heaven is much higher than sun.

God made every thing at first, and God takes care of every thing. God made you, my little child, and God takes care of you always. ……………といつた内容である。蘇峰のいう「子供だましと見るべき…本」はこの本の事と推察される(後述)。この本は龐大に刊行、四十近い言語に訳されトラクトとして出版されている。

日本で最初に訳出されたのが先述の『真神教暁』(全三巻)である。訳者はカロザース (Christopher Carrothers, 1839-1921) で、刊記には「耶蘇降生千八百七十三年十二月廿五日 真神教暁 明治六年西十二月二十五日



「発兌 東京築地六番 嘉魯目耳士氏著」とある（巻之一扉Ⅱ中表紙 『植村正久と其時代』第五卷 p.500 昭和13年 教文館参照 なお カロザースについては高橋俊明「カロザースの写真と彼をめぐる秋田の人々」『英学史研究』第32号、99年参照）。

明治<sup>一九〇七</sup>40年12月、荒細もと子訳『PEEP OF DAY 暁天』（教文館）が出版されてゐる。但、Lesson 3. Of a father's care と最終の 53. The Judgment Day は訳出されていなく。

Favell Lee Bevan は一八一四年、Rev'd. Thomas Mortimer と結婚後も、何冊かの子供向け地理書を著している。Far Off or. Australia, Africa and America described. (『オーストラリア・アフリカ・アメリカ案内記』) Far Off or. Asia described. Near Home; or Europe described. 等がある。

先述の No. 4・5 についても少し補っておく。これらはジェーンズが生徒に配り与えたものとしてよい。下村孝太郎は「氏（註 ジェーンズ）は洋学校を去る前年の冬に至り聖書（勿論英語聖書にして四福音書を別々にしたる小本）を配布し、自宅にて会読を始めた」（下村孝太郎「ヂェンス先生を追懐す」『日本ニ於ケル大尉ヂェンス氏』 p.91 明治27年 警醒社）とあり、海老名弾正も「旧新約聖書の英訳を、貰つたので、土曜日の夜、読みにヂェンス邸を訪れた：明治六年の秋、ヂェーンズは我々の組（註 二級生）に向ひ、聖書を読みに来い、と勧めた。尤もこれは、上級生には一年前から行つてゐた」（渡瀬常吉『海老名弾正先生』 p.36 昭和13年 龍吟社）と述べているからである。

徳富蘇峰は「当時長崎にスタウト（註 Henry Stout）といふ宣教師があつて、そこから凡有る聖書及びトラクト（基督教宣伝の文書）の類を取寄せ、それを生徒に分配した。その中には支那訳もあり、英書は固より旧約書の話などには、子供だましと見るべき、絵入りの立派な本などもあつた」（『蘇峰自伝』 p.61 昭和10年 中央

公論社」と記している。杉井六郎氏の労作『徳富蘇峰の研究』（77年 法政学出版局）でも、この点に言及論考されている（同書 pp.33～34 p.39）。ジェーンズがスタウトに漢訳と日本語訳の聖書、讚美歌を大量に注文したとあるが、日本語の新約聖書の全訳完成は明治12年11月3日とされており、スタウトに注文した日本語訳の聖書というのは具体的には不明である。或は竹松旧蔵のNo.5の「ヨハネによる福音書」の事であろうか。

以下若干、スタウトについて触れておく。Henry Stout（<sup>天保9</sup>一八三八―<sup>明治45</sup>一九二二年）は米国ニュージャージー州生れの、米国オランダ改革教会の宣教師である。フェルベッキ（Verbeck）の後任として長崎広運館（前身は済美館 後 広運学校↓長崎英学校）の英語教師として明治2年来日。フェルベッキも同じ教会の宣教師である事はよく知られている。

洋学校にジェーンズを斡旋したのがフェルベッキである事は、これもよく知られている。スタウトは、熊本に赴任するジェーンズを、「熊本にうってつけの人」と評したり、ジェーンズの方もスタウトに、洋学校で祈祷会が開かれている、といった熊本での様子を知らせたりしている（杉井 pp.21～22）。明治9年1月末の花岡山血盟後の一部の洋学校生徒が長崎のスタウトの処へやって来ている事も判っている（杉井六郎「長崎在住宣教師ヘンリー・スタウトの見た熊本バンド」『キリスト教史学』第二二集 昭和45年 田中啓介「長崎における幕末明治初期のアメリカ人宣教師―ヴァーベックとスタウト」『英学史研究』第15号、83年参照）。

スタウトと洋学校の関係については、小崎弘道は「…洋学校に信徒の起った評判が世間に伝はるや、第一に來訪したのは長崎に居た英国監督教会の宣教師モンドレル（註 Herbert Maundrell）で、彼は一同にバプテスマを施したいと望んだが一人も応ずる者がなかった。次にはレフォームド教会の宣教師スタウト博士と同伝道師瀬

川浅君の両人が同じく長崎から来着した」(『七十年の回顧』 p.23 昭和2年 警醒社)と記している。なお、熊本バンドの洗礼については『海老名弾正先生』 pp.118～122参照。

ジェーンズはスタウトに若干の援助をしている。明治6年、スタウトは長崎の自派の宣教師館の敷地内に十三坪ばかりの小屋を建てバイブルの講話等に使用するのだが、その小屋の建築資金を、ジェーンズが寄付している(黒木五郎編『梅光女学院史』 pp.80～81 昭和9年 G・D・レーマン著 峠口新訳『ヘンリー・スタウトの生涯』 pp.38～39 '86年 新教出版社)。二人の関係の密である事は、右の事によって判る。然し、スタウトの業になる長崎の東山学院神学科は明治30年、明治学院に吸収(昭和7年に東山学院全体が吸収)されたのであるが、この明治学院歴史資料館には残念ながら、ジェーンズがスタウトを通して聖書等を入手していたとする直接的史料は見当たらない事、<sup>ゆらに</sup> 横浜開港資料館蔵の The Reformed Church in America, Japan Mission のうち、Henry Stout Papers (Correspondence) を一瞥してみたが、聖書等がジェーンズの許へ云々とする paper は未見である。No.8の見返し遊び紙のウラに興味深い書込みがある。「Peep of Day I have wished to give this book to My teacher LL Janse who came from America to Kumamoto School in 1873.」これは、竹松の洋学校入学の明治6年の事を記している。「…私は、この本を私の師・LLジェーンズ先生に貰って嬉しかった。先生は米国から熊本学校に來られた方である。一八七三年」といった意であろうとしておく。入学後、英語が少し判り始めた後の書込みである。「Have wish」は、嬉しかった気持の表現と見做し、「to」は「に」、「give」は「頂戴する」の意としておいた(乞御批正)。まさしく、この書込みは洋学校でのジェーンズの、これ迄語られてきた活動を実証するものである。なお、「This book belongs to T. Sakanowuye」の書込みがウラ表紙側の遊び紙にある。誤りのない英文である。

No. 9・10・11 (下図はNo.9巻之一 扉)

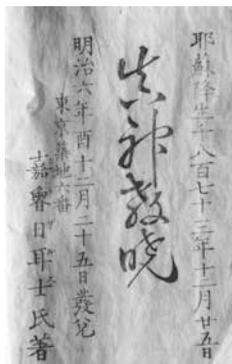
No. 8で触れておいた。

No. 16 (扉)

大きさは三二一折 (32mo.) 活字はNo. 4と同じスモール・パイカ。上海の Presbyterian Press (長老派教会印刷所) で出したもので、全二八四頁。日本には三本は現存しているうちの一本、としてよいものである。清国の同治3年は日本の元治元年。恐らく、師・ジェーンズから贈られた書として他の福音書ともども竹松が大切に篋底に秘蔵し来たったものといえる。

No. 17 (扉)

明治18年の出版 (全七五八頁) から判るように、竹松が洋学校卒業十年近く後になって購入、然も、当時の月給の二十分の一近くを出しての事と推察される (門脇清・大柴恒『門脇文庫日本語聖書翻訳史』 p.183 '83年 新教出版社参照)。竹松は基督教への関心を忘れていなかった、という事になる。



以上にて「坂上資料」の中での稀観書の紹介を終わる（「英文数学ノート」等については後述）。

#### 四 坂上家

「先祖書」によれば坂上家の初代・安兵衛は加藤清正が天正16年一五八八の肥後入国の際、江戸の浅草から召連れてきた瓦職である。その後、細川家世襲家老筆頭・八代の松井家（三万石）の御用瓦師・家来として、現・益城町小池いひの土山に居を構え、今日に至っている（『肥後読史総覧』上 pp.1045～1046 昭和58年）。また、『益城町史』通史編 p.689には、享保9年一七二四に松井求馬くまの家来になった、とある。求馬は松井家第四代・寿之ひさゆきの次男で、古城家（次門松井家）初代・祐之すけゆき（寛文12一六七二～延享4年一七四七）の事である（「松井家先祖由来附」『八代市史』近世史料編Ⅷ、平成11年 八代市教育委員会）。

竹松は、この坂上家の長男として後述の如く、家郷を離れ得ず、教員生活を、しばらくしたが家業の瓦造りに励んだのである。その間の事情を『土山の歴史』pp.90～91（坂上さかうえ一雄編 '59年 私家版）は次の如く記している。

坂上竹松と村上新平

坂上竹松と村上新平、私はこの二人を土山の瓦焼き史上に書き止めておきたい。

何と云っても私が覚えてからの、土山の瓦焼きでは、坂上竹松と村上新平の二人は特筆に値する瓦焼きであつた。

坂上竹松は、坂上右伝の長男であつて、天才があり、水野頼山先生の門生中の逸物だつたと聞く、後に熊本英学校マツに学び、木山の角田先生など同門だつたと聞いたが、おしいことに公職に向わず家において家業を継いだ。

私がこの二人を特筆すると云ふのは土山の瓦焼きの中でも、一戸に二窯以上を据えて瓦を焼く家は何軒となかった、皆一窯ぎりりで年中多く焼くとするも、三十窯位いであつて間には十窯位い普通二十窯か二十五窯位焼いていた様子である。ところが此の二人は各三基の窯を据えて一ケ年間には百窯位を焼いて其の生産した瓦を自分で小売販売したのだから大したものだと私は感心する。そんな大がかりな、生産だから製造法（た）面は職人が重に仕事に従事し、家族のものは雑務に追われ勝ちである、が此の二人のやり口を見ると村上は専ら販売に力を入れて瓦仕事は一切出来ない、仕事の切り廻しは妻のトリが切り盛りをした。焼人まで他人の手をかりた。が坂上竹松は販売も自身の一手でした窯焼きも自身で焼く其の勤（た）勉振りには感歎に値した。

明治、大正にかけて此の二人こそ土山瓦焼中の偉人だった。

坂上家にゆかりの瓦類を若干、紹介しておく。熊本城不開門櫓に今も使われているのは「坂上」の押印付瓦で、他に、先祖名・安兵衛の押印付瓦もある事が知られている。昭和55年の修復時に明らかになった、との事である（『益城町史』

通史編 p.692・683 参照）。

また、「坂上」の押印付瓦が大量の出土破片の中にも発見されている。明治10年の西南戦争時に消失した熊本城跡の発掘調査（平成16年）で出土したものである。その拓影を上提示しておく（熊本市熊本城総合合事



（たて一寸ほど）



（飯野小学校：野口裕展先生提供）

務所提供)。

右の画像は、坂上家のある小池の土山を校下とする益城町飯野小学校所蔵の土山瓦の中の、坂上家から寄贈されたものである。竹松の父・右伝(5)(号。本名・惣次郎)作、獅子頭二体で銘は向って左側の方の裏にある。

## 五 竹松の洋学校入撰

竹松(万延2)(一八六一)大正10年12月29日(一九二一)

惣次郎(右伝)の二男三女の長男として、現・熊本県上益城郡益城町小池の土山にて誕生。惣次郎の書き遺した「家記」では、文久元年正月7日生、後に訂正して8日生、としている。町発行の戸籍票では「文久元年二月七日」生、となっている。文久改元は万延2年2月19日であるから、正月生にせよ、2月生にせよ竹松は万延2年生となる。竹松自筆の履歴書(後述)では「慶応元年一月生」としている。どうやら少し若く見せようと茶目気を出したようである(享年六二)。

## 入学志願

竹松は、水野貞秀(7)(沓問多 号・頼山かざん 天保8(一八三七)→明治28年(一八九五))の薫陶を受けたと伝えられている。水野頼山は明治初年に、肥後三筆と称揚された書家である(水野家は肥後細川家々臣・水野家Ⅱ五百石Ⅱの一族 川口恭子編『細川家家臣略系譜』83年 熊本藩政史研究会参照)。竹松の坂上家の小池村の土山に頼山の先代が土着し、頼山は幕末、この地に私塾・率性堂を開いて門人二十人と称され、竹松は此所で漢学の基礎的素養を授けられていた

可能性が高い。明治5年、頼山は、小池村の南に隣接する木倉郷きくら（現・御船町みふね）の辺田見郷学校へたみ（男子三十 女子八人ほど）で明治8年迄、訓育を任されている（明治8年4月 生地の小池村の円林に円林小学校Ⅱ現・飯野小学校Ⅱが設立されるや 校長職となる）。

竹松は、頼山が木倉郷学校教導時代の教え子である。この事は『熊本県公文類纂24―10』の「洋学」の中にある文書から判明する。

洋学校入学願書<sup>9)</sup>

鮎郷土山村士族信舎長男

漢籍 綱鑑迄  
国史 国史略日本外史迄

北村 信 篤

十六歳ト二ヶ月

同 士族富太郎長男

同右

出田 貞 雄

十五歳ト十一月

木倉郷南田代村士族巖正長男

漢籍 史記迄

和田 彦 熊

十三歳三ヶ月

鮎郷土山村平民右伝長男

同右

坂上 竹 松

十三歳ト四ヶ月

信舎二男

漢籍 書経迄

北村 潤雄

十二歳ト十月

右之面々洋学校入学為仕度奉願候事

癸酉五月

同渡 邊 人<sup>印</sup>

木倉郷学校教導

水野 一問<sup>マ</sup>太<sup>マ</sup>印

白川縣

(付箋)

及試験申告ニ付当月廿五日ヨリ月末迄ニ出校

候様被及御達可被下候也

五月十四日 洋学校

白川縣

## 成績

洋学校生徒の詳細な成績が熊本県の「県政史料」の中に遺されてはいない。当時の『白川新聞』の記事による以外にないが、大略（順位）は判明する。

熊本洋学校三級生 坂上竹松―貴重遺品と洋学校教育―

竹松は、明治4年9月開校の洋学校へ三級生（第三期生）として明治6年8月入学。洋学校が生徒のキリスト教入信問題で同9年8月、廢校に至ったので、本来四年間の正式課程の履修不可能となり、三年間での繰上卒業である（同9年7月31日付）。以下、前記新聞によって竹松の成績を追ってみる。

竹松の成績が判るのは、『白川新聞』の次の二種である。

同新聞**第三号**（明治7年9月27日発行）の「学校録事」欄の「洋学校生徒進退ノ続」に竹松他、三級生の成績順位が初めて記されている。

竹松の一年次の成績は左の通りである。

「文字綴字」……………	九位
「諸方并文典」……………	十六ヶ
「習字」……………	十六ヶ
「小算数」……………	十五ヶ

〔三級生 癸酉九月 第一周年卒業〕（二六名中）

この科目名は、後述の「第一周後半卒業科目試験承届」（明治7年7月24日付 第一年次後期セメスター履修科目證明書Ⅱ以後「履修證」と略）の科目名と少し異っている。「綴り書」、「第二課程書」（後述）、「文典」、「中地理書」、「習字」、「作文」、「英語」となっていて、「小算数」はない。一年次前期セメスターの履修科目は「履修證」によれば「文字綴」と「第一課程書」のみである（後述）。

竹松の、二年次成績は左の通りである。

「算書」	九位
「地理書」	八々
「代数学」	七々
「歴史」	九々
「作文」	八々
「英語」	八々

右は『白川新聞』第三七号附録「明治八年七月洋学校生徒学科試験各科比較席順表」のうち、「三級生癸酉年撰入」欄（但、試験時病欠者五名で受験者十名による順位である）による。これは二年次後期セメスターでの履修科目の成績で、後掲の明治8年7月25日付の「履修證」と対応している。

この時点での三級生在籍数は

「依願東京へ転学」……二名

「依願退校」……五名

「退校申付」……二名 と一年次終りの二六名から九名減の十七名。試験時病欠者五名以外に、「病氣長ク欠席試験表席順ニ加ヘス」とされている者が二名いる。

竹松の、二年次修了時の同級生には、岡田松生、不破唯次郎、後述の福島綱雄と郡徳隣がいる。

生徒名については、『バンド研究』『隈本古城史』『熊本英学史』（昭和60年 田中啓介編 本邦書籍）『熊本バンド 近代日本を拓いた青春群像』（昭和51年 熊本バンド百周年記念展パンフレット）等に記されているが、

二百名ほどの全在籍生徒名や経歴の確定には至っていない。

## 六 竹松の履修科目―カリキュラム―

「坂上資料」の中に、先述の「履修證」が六枚、即ち、三年間分存在する。但、これにより、洋学校四年間のカリキュラムが確定する訳ではない。竹松は、明治9年1月末の花岡山結盟以降の洋学校の大混乱、同年8月の廃校によって、三年間での繰上卒業を余儀なくされているからである。六枚の「履修證」の中で、明治8年12月29日付のもの迄（三年次前半期迄）は大略、洋学校のカリキュラムに則したものと見做してよい。

### 「履修證」

県名の変化は明治4年7月14日、廃藩置県で肥後藩々領の大半が熊本県となり、同年11月14日、県域を改変したの熊本県、同5年6月14日に白川県と改称。同9年2月22日に八代県を併合して、改めて熊本県となったからである。

洋学校印は陰刻一寸二分（約3.3 cm）角。「学校印章」である。

一年次履修の「…課程書」、は英語教科書である。洋学校旧蔵教科書（熊本県立大学蔵）の中に、Second Book of Lessons for use of schools. に、「程課書」の貼紙があり、「…課程書」はこのシリーズのものである可能性も否定できないが、マガフィの教科書である可能性の方が高い。それは、

① 先の旧蔵教科書・McGuffey's new Third Eclectic Readers for young learners. には「第三課程書」と貼紙が

あり、

② 前掲、下村孝太郎が「モッゴヒ」の「リーダー」に移りし時も訳読を教ゆるものと異なれば、始めより開拓使の字引にて、僅かに自ら其訳を附けし位にて、其困難は中々に非常にありき」と述べているからである（『日本ニ於ケル大尉チエンス氏』 p.89）。

「算課」と「算書」について若干、触れておく。洋学校での算術の教科書は「小算書」＝ Intellectual Arithmetic, by Induction and Analysis. By Joseph Ray, M. D. の「大算書」＝ Practical Arithmetic, by Induction and Analysis. By Ray. (『バンド研究』 p.140)とされているが、「算課」は、暗算（胸算）のような算術を導入、展開していく、といった「小算数」とみてよい。「算書」は、レイ (Ray) の「大算書」が中心であったが、竹松の遺した英文算数ノートを見ると、必ずしも、レイの「大算書」のみではなかった事が判る（後述）。

レイ (Ray, 1807-1865) は米国、ヴァージニア州生身。オハイオ・メディカルカレッジで医学博士 (M. D.)。一時、外科医をしていたが Woodward College の数学教授（一八三四～五一）。教育者として算数、代数の教科書を何冊か著している人物である。

「開拓使辞書」は荒井郁（之助）編纂『英和对訳辞書』（明治5年7月）の事で開拓使から出版されたので、この名がある（豊田実『日本英学史研究』 pp.45～46 昭和14年 岩波書店『英学史研究』第12号 79年、惣郷正明論文参照）。横井時雄も「開拓使出版辞書を相手にして訳読を試むその苦心マヤ少なからず」と記している（前掲『日本ニ於ケル大尉チエンス氏』 p.147）。但、「三年になると、ウエブスターの中字書を与えられた」と海老名は記している（渡瀬常吉『海老名弾正先生』 p.81 昭和13年 龍吟社。この辞書の詳細未詳）。

竹松も「開拓使辞書」を大いに利用していた。その遺した、美濃紙四ツ折を綴じた「英単語帳」（坂上資料）

**No. 43** ) の表紙には Chemistry と墨書され (以降は鉛筆)、その五丁目のウラには、Water in the Vegetable World とあり、七つ後の単語は「carrots 胡蘿蔔」(註、<sup>くわ</sup>葡=大根) とある。『開拓使辞書』では「Carrot, s. 胡蘿蔔」である。これは洋学校の化学教科書で Steele's New Chemistry としつ知られる Fourteen Weeks in Chemistry. By J. Dorman Steele, Ph. D., author of the fourteen-weeks series in natural science. A. S. Barnes & Company, New York and Chicago. の d.58 の箇所である。この書の d.69 Charcoal の単語は先の「英単語帳」六丁ウラに引いて記している。以上、竹松が『開拓使辞書』を利用していた証左である (s. は substantive の略名詞の事)。

(「履修證」全六枚を以下に提示しておく)

坂上竹松

文字綴

第一課程書

前半年卒業

義届長也

明治六年庚寅三月廿日

白川縣

洋學校



坂上竹松

綴り書 第二課程書 文典

中地書 習字 作文

英語

第一周後半年卒業科

試験義届長也

明治六年甲戌七月廿日

白川縣

洋學校



一年次科目「履修證」

坂上竹松

地理学

算課

英語 試験

作文 同上

第二周前半卒業  
兼届也

明治七年戊三月廿五日

洋学校

坂上竹松

算書

地理書

代数学

歴史

作文

英語

第二周後半期卒業  
試験之證

明治八年乙亥七月廿五日

白川縣

洋学校

二年度科目「履修證」

窮理書 代数学  
幾何学

坂上竹松

第三周後半期卒業  
之證附與之

明治九年七月廿九日

白川縣

洋學校



幾何 人體學 化學  
星學 地質學 演舌

坂上竹松

第三周後半期卒業  
之證附與之

明治九年七月三十一日

熊本縣

洋學校



三年次科目「履修證」

年次別履修科目

以下に、これ迄の史料から判る年次別（当時は「周年」別）履修科目（カリキュラム）の表を提示しておく。

年次別履修科目表

『白川新聞』第三七号附録・8年7月学課試験各科比較席順表（後期のみ）及び、竹松の各年次「履修證」による（太字は竹松の「履修證」の科目 明治は略）。

前期	一級生 <sup>4年8</sup> 月始業		前期	一級生 <sup>5年9</sup> 月始業		前期	二級生 <sup>6年9</sup> 月始業（竹松の級）		前期	四級生 <sup>7年9</sup> 月始業（竹松の一下級下）	
	四周年（四年次）			三周年（竹松三年次相当）			二周年（竹松二年次在籍）			一周年（竹松一年次相当）	
後期	窮理書、化学書、地質学、人体学、星学書、作文、英語	窮理書、代数学、幾何学	窮理書、化学書、代数学、幾何学、歴史、作文、英語	地理学、算課、英語 <sup>（履修）</sup> 、作文 <sup>（同上）</sup>	算書、地理書、代数学、歴史、作文、英語、算書、地理書、代数学、歴史、作文、英語	文字綴、第一課程書	綴り、読方、地理書、文典、算書、地図学、習字、作文、英語、綴り書、第二課程書、文典、中地理、習字、作文、英語				
<p>註一級生十人「教則満期卒業」。一人病欠。三人東京へ転学。山崎為徳、伊勢時雄、小崎弘道、森田久万人、他二名三級生ヲ教授ス。同級生に横井時敬、余田司馬人。</p> <p>註十二人受験合格。病欠一、東京へ転学一、退校二、退校申付一。宮川経輝、市原盛宏、金森通倫、海老名喜三郎、下村孝太郎他一名一四級生ヲ教授ス。同級生に浮田和民、加藤勇次郎、和田正修。</p> <p>註後期受験合格者九名。病欠五、東京へ転学二、退校五、退校申付二、病欠長期のため席順表に加えない者三。同級生に岡田松生、福島綱雄、不破唯次郎。</p> <p>註四級生の後期受験合格者は十六名。病欠三。退校五。同級生に辻豊吉、坂井禎甫。</p>											

なお、この附録には8年7月現在、生徒数は卒業生十人を含めて三十五人。長期病気等を含めての在籍数は四

六人と記されている。8年9月入学の五級生の総数は不明であるが、そのうち二十名の氏名は判っている。徳富猪一郎は再入学、鎌田(原田)助、蔵原惟郭も五級生である(洋学校生徒名の詳細は 前掲『熊本バンド 近代日本を拓いた青春群像』Ⅱ『100周年記念展パンフレット』pp.40〜44)。

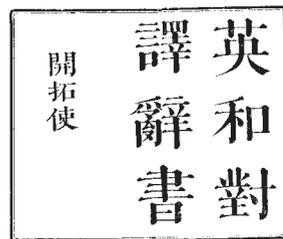
なお、竹松の履修科目は、後述の卒業證書での科目数十一から判るように英語の綴り、英語、読本等は読み、書き、文法、作文、演舌等として一ユニット(科)に纏められているので、竹松も卒業時迄には十一科履修している。一級生のみ8月始業は白川新聞による(後述の卒業證書では9月1日である)。

## 七 カリキュラム先行研究等

竹松の「履修證」によつて年次別履修科目が大略、判るようになったが(但 彼は繰上卒業のため「履修證」は必ずしも正確に年次別を反映していないし もともと 洋学校には年次別に厳格に決められていた様子もない)、洋学校四年間の年次別履修科目は卒業證書記載の科目名や卒業生の回顧録等々から推察する以外に方法がなかったのである。以下、先行研究を年代の古いものから見ておく。

### 1 昭和40年『バンド研究』 pp.149〜153。

杉井六郎論考は洋学校廃校後、これに準じて設立された<sup>こうれい</sup>広取学校のカリキュラムが明確に知られているので、



開拓使辞書  
(21 × 14.3cm 本文のみ 546  
丁 部厚く 枕形辞書である  
国会図書館蔵)

これを提示して洋学校のそれを類推している。

広取学校は廃止された洋学校を再興せんとして嘉悦氏房、林秀謙（熊本県官員）、野々口為志（洋学校幹事役）が中心となって創立、明治11年9月認可。前身は同10年10月、嘉悦が自宅で開いた英学塾。広取龔で、洋学校にあった教科書類が熊本県より広取学校に貸与され、これを用いてのカリキュラムであったから、洋学校のそれを窺知できるとするのである（広取龔については『嘉悦氏房先生伝』 p.17 明治42年 隆文社参照）。

## 2 昭和59年『隈本古城史』 p.446～450。

花立三郎論考は「その典拠となるべき史料がないので、完全なる解明は困難である」とし、洋学校一級生・余田司馬人と、二級生・宮川経輝の卒業證書、野々口為志の談話、小崎弘道の『七十年の回顧』（前掲）、海老名弾正の回顧談（前掲『海老名弾正先生』）、森田久万人の履歴書から復元したカリキュラムを提示している。

## 3 昭和60年『熊本英学史』 p.103～104。

田中啓介論考はジェーンズが在学し、教員でもあったウエスト・ポイント（陸軍士官学校）の生活指導方針を洋学校のモデルとしたのは勿論、科目の中から純粹に軍事の目的のもの、フランス語、スペイン語を除き、替わりに、歴史と人体書（生理学）を加えたものが洋学校のカリキュラムと殆ど一致する、としている。但、『バンド研究』 p.312で、高橋虔教授は、C. W. Ighartの'59年の論文の中に「学校が全体としてジェーンズの中に帰して、彼は洋学校を little West Point と位置付けていた…」という文言のある事を早くに紹介されている。

4 『海老名弾正先生』（参考） pp.79～84、104～105。

先の2、3の花立、田中両論考も、この海老名の回顧談（洋学校での教育が実に、いきいきと語られている）から年次別履修科目を還元したのである。即ち、以下の如くなる。

（広取学校のカリキュラムは『バンド研究』 p.150 『熊本英学史』の花立三郎論考 p.170参照）。

海老名の年次別履修科目

一年次

発音 スペリング（ウエブスターのスペリングブック 後述） 読本 (McGuffey's New First Eclectic Reader for young learners. 〓 第一読本及び 課程書 同シリーズの New Second Eclectic Reader. 〓 第二読本) 課程書 英文法

二年次

地理 算術 歴史 代数

三年次

物理学（窮理学） 代数（続き） 幾何 三角（三角法） 測量術 化学 生理学（人体学） 天文学（星学）  
さらに、読本と英語演説

四年次

海老名は、四年次の履修科目については具体的に触れていない。これは、明治9年1月の花岡山での盟約で洋学校が混乱したり、後進生教授方となっていた故ではないか、と推察されるが、海老名は「私は三ヶ年の課程を終って第四年目の課程に移った。天文学を学び始めた。…その他、地質学を読み始めた。」（前掲書 pp.104～105）

とある。よって、

天文学（三年次に続き） 地質学は確かである。

##### 5 卒業證書の科目―一級生・余田よだと二級生・下村―（参考）

この證書はジェーンズ自筆の英文と、洋学校による和文対訳が付され、證書が洋学校公認のものである事を証明する形式になっている。證書記載の**十一科目**は洋学校の「定則」と規定されている。即ち、**卒業必須科目**である。

一級生・余田司馬人の卒業證書（『明治天皇巡幸誌』昭和7年 肥後明治天皇聖蹟光揚会）を以下に紹介する。但、二級生・下村孝太郎の證書（同志社社史資料センター蔵）と異なる箇所には下線（傍線）を施し、「」内に下村の證書の文言を記しておいた。

余田のにはなら Orthography（正書法）が下村のには加わり、余田のにも Elementary Practical Surveying が下村のには削除され〔増科〕として Theory and Practice of Surveying（測量の理論と実際）が記われている。

To all Persons Concerned.〔下村なし〕

This to Certify that: Mr. Sibato Yoden of Kumamoto Sirakawaken [Mr. M. Kotaro Simmomura of Kumamoto Kumamoto Ken] Japan.

Entered Kumamoto English School at the beginning the Academic Year September 1st. 1871 [1872]: that he has been prompt and constant in attendance, one period of sickness excepted〔下村なし〕 most commendable

in department, diligent and successful in application to all studies of the course throughout the entire term of four years : that he has creditably passed every annual and semi-annual examinations : and that he is entitled to this Certificate of Proficiency in the various branches of study embraced in the Course of Kumamoto English School, namely, 1 Elementary (Elements of) English Language embracing (Orthography, 下村に追記) Reading, Writing, Grammar, Composition, Declamation and Rhetoric.

2 Intellectual and Written Arithmetic. 3 Geography.  
4 General History. 5 Algebra. 6 Trigonometry and Elementary Practical Surveying. (and 以下下村になし)  
7 Natural Philosophy. 8 Chemistry. 9 Astronomy. 10 Geology. 11 Physiology. (以下下村に追記 and also the Additional Course of 1 Ancient and Medieval History and History of England and the United States. 2 Theory and Practice of Surveying.)

L. L. Janes.

Given at Kumamoto Japan.

July 26th 1875. [August 1st. 1876]

卒業生徒工ノ免許證狀

此證狀ハ左ノ条目ヲ表スヘキ為メ也

(下村孝太郎)

余田司馬人

右八千八百七十一年<sup>明治</sup>四年九月第一日熊本洋学校創業ノ日ヨリ新二(千八百七十二年明治五年九月第一日熊本洋学

校ニ於テ）英書ノ業ヲ始メタリ〔ム〕○品行最正シク勇奮堅固ニシテ学問ニ注意シ全ク四年間〔期病外〕〔下村なし〕ノ課程ヲ修ルニ平成勉強且ツ〔下村なし〕成功ノ状ヲ顕シタリ〔セリ〕○正シク年々大小試験ヲ経テ此学校ノ定則タル左ノ科目ニ於テ進歩ノ効トシテ此免許状ヲ授与スル者也

第一 語学〔字学〕 読方 習字 文典 作文 英語〔演説〕 文学

第二 胸算 算術

第三 地理書〔学〕

第四 万国歴史〔万国史〕

第五 代数学

第六 幾何学 測量術

第七 窮理書〔学〕

第八 化学書〔なし〕

第九 星学書〔なし〕

第十 地質学

第十一 人体学

〔増科〕

〔第一 上古史 中世史 英国史 米国史〕

〔第二 実測〕 〔一〕は下村證書加筆

千八百七十五年七月二十六日〔千八百七十六年八月二日〕

エル、エル、ゼーンズ

於日本熊本与之〔日本熊本ニ於テ与之〕

右教師授与スル所ノ免状訳之及調印者也

明治八<sup>九</sup><sub>\*</sub>〔九丙子〕年七月二十六日〔八月二日〕

白川〔熊本〕県洋学校<sup>②</sup>

卒業證書には年次別に履修科目は明記されていないが竹松の「履修證」や卒業生の回顧談から、卒業必須十一科目のうち、第一～四科が一～二年次、第五～十一科が三～四年次履修とみてよい。

竹松は一年短い、三年での繰上卒業であるが、一応、必須十一科履修合格したものとして卒業とている。然し彼は、その不充分さを自覚していて、後述の如く、卒業後も懸命に、充分に学び得なかつた科目を研鑽したノートが遺っているのである。彼は、一年次はゼーンズ自身から、二年次には後進生教授方の、一級生・山崎為徳、伊勢時雄、小崎弘道、森田久万人に、三年次には二級生・市原盛宏、金森通倫、宮川経輝、海老名喜三郎（弾正）、下村孝太郎といった同志社バンドの錚々たる人々から指導を受けているのである。彼の遺品に基督教関係の稀觀書が存在する所以の一因とも考えられる。

## 八 竹松の学習

遺されているノート類から彼の勉強ふりと洋学校での授業の態様を窺い見てみる事にする（No.は「竹松資料」

の番号)。

## 英文数学ノート

### 1 原本不詳ノート (No. 31・32・40・41)

No. 31 表紙に Fraction and United State Money と墨書。扉には「分数平方立方之記」とあり、分数の定義として A fraction is one or more equal parts of a unites.. Fraction is expressed by divisor and multiplying. This method is fully explained in the author's Complete Arithmetic. (下線は筆者 分数の定義として不可解) とある。洋学校での「大算書」履修は二年次前期であり(竹松の「履修證」)、このノートの速筆ぶりから見ても、洋学校での授業時のノートの取り方を示していると推察される体のものである。洋学校卒業後にノートを取ったと推定されるものとは明らかにノートの取り方の丁寧さが異なっているのである。

下線の in the author's Complete Arithmetic とは具体的に何をいうのか不詳である。教師用のマニュアル本の類なのであろうか。ジェーンズ直接の授業なのか、先述、後進生教授方(池田朔風「熊本洋学校」〔十三〕『九州新聞』大正10年12月1日号参照)による授業のノートなのか(表紙右上に 1st と記)。

一冊の算数書が知られてくる。Davies' Practical Arithmetic. = Practical Arithmetic : embracing the science and application of numbers, by Charles Davies LL. D., A. S. Barnes & Company, New York and London, 1874. である。Davies は Author of a Complete Arithmetic と呼ばれてくる (Mathematical Dictionary and Cyclopedia of Mathematical Science. A. S. Barnes and Company, New York and Chicago, 1869.) また、シエー

ンスの出身校で教官でもあったウェスト・ポイントでは、ディヴィースは Author of the West Point Course of Mathematics と称されていたので、洋学校でもディヴィースの算術書が利用されたのはなにかと推察されるが確証となる と難い感がある。

このノートは次に、Properties of Numbers. Definition. A number that has no divisor except itself and 1, is called the prime number. A number that has no divisor beside itself and 1, is called a Composite Number. The factors of a number are called its factors; and prime divisors are called prime factors. なる (複合数の定義が混乱)。

「大算書」といわれる Ray's Practical Arithmetic. Ⅷ FACTORING. DEFINITIONS — 1. An Integer is a whole number; as, 1, 2, 3, &c. 2. Whole numbers are divided into two classes; prime numbers, and composite numbers. 3. A prime number can be exactly divided only by itself and unity (1). 4. A composite number... can be exactly divided by some other number beside itself and unity... (p.120) なる。

Davies' Practical Arithmetic. Ⅷ PROPERTIES OF NUMBERS. Exact divisor... なる。2-5迄の倍数の見分け方が記してある。

A PRIME NUMBER is one which has no exact divisor : 1, 2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19, &c.

full, but in measuring corn in ear, potatoes, apples, and other large articles, the measure must be heaping full.

1. What will  $5\frac{1}{2}$  quans of plums cost, at 4 cents per pint? Ans 49 cents.

2. A man carried 32 pecks of cherries to market, and

No. 32 ノート (本書一五五頁中央部分)

are prime numbers. A Composite Number being the product of two or more numbers, has two or more divisors. A Factor of a composite number is always an exact divisor. (p.72) ㄱㄴㄹ。

竹松旧蔵のカッケンボス著 A Practical Arithmetic. ㄱㄴ Prime and Composite Numbers. Every number is either Prime or Composite. A Prime Number is one that can not be divided by any number but itself or 1, without a number: as 2, 11, 17. A Composite Number is the product of two or more factors greater than 1, and is exactly divisible by each of its factor... The first hundred prime numbers are as follows: -1 2 3... 523. (p.64) とある。

右の事から、竹松のこのノートが洋学校での授業の様子を示しているものとして見る時、理解の困惑ぶりと、いずれかの教科書どおりに進められたものでない事が見えてくるのである。

### No. 32 Denominate Numbers (註 名数) と標題。

このノートは、1 Lessons Dry Measure 2 Liquid 3 Long 4 Land or Square 5 Cubic 6 Wood 7 Circular 8 Time 9 Avoidupois (アヴァダポイズ 常用ウエイト) 10 Troy weight 11 Apothecaries' weight (薬用重量法) 12 Miscellaneous 計十二項目の計測法の記述である。Lessonsを竹松は Lesson と墨書して、急いでノートを取ったようである。各 Lessons は「1 Lessons」(次頁)の如く、定義、名数の表 (Table)、ノート、演習問題若干という形式である。竹松の No. 32 ノートの 1 から 11 の順序や記述内容は先に挙げた、どの教科書の記述と、何がしか異っている。洋学校では別の教科書を用いていたものなのか、それとも教科書に捉われず、自由に授業を展開していたものなのか。筆者は後者としておきたい (表紙右上に 2nd.)。

1 Lesson  
Denominate Numbers.

Dry Measure

Dry Measure is used in measuring grain, fruit, most vegetables, coal, and many other dry articles.

The denominations are <sup>(14)</sup> pints, pecks, and bushels.

Table

2 pints are 1 quart.

8 quarts are 1 pecks.

4 pecks are 1 bushels.

Note

1. The standard bushel is  $18\frac{1}{2}$  inches in diameter and 8 inches deep. if (it) contains  $2150\frac{2}{3}$  cubic inches.
2. In measuring grain, seed, and small fruits, the measure must be even full; but in measuring corn in low, potatoes, apples, and other large articles, the measure must be heaping full.
1. What will  $5\frac{1}{2}$  quarts of plums cost, at 4 cents (a) pint (?) (筆者補)

Ans. 49 cents.

(以下 6 問題)

2 Lesson  
Liquid Measure  
(以下 略)

Ray's Practical Arithmetic. (p.82) では

**DRY MEASURE** Is used in measuring grain, vegetables, fruit, coal, &c.

**Table**

2 pints (pt.)	makes	1 quart,	marked	qt.
8 quarts	.....	1 peck,	.....	pk.
4 pecks	.....	1 bush,	.....	bu.

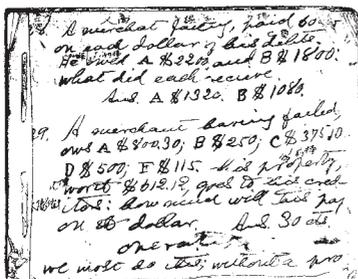
Davies' Practical Arithmetic. (p.160) では

**DRY MEASURE**, is used in measuring all dry articles, such as grain, fruit, salt, coal, &c. とあり、Table には、他にはない 86 Bushels ..... 1 Chaldron ... ch. があったりする (この頁は全て横書きとした)。

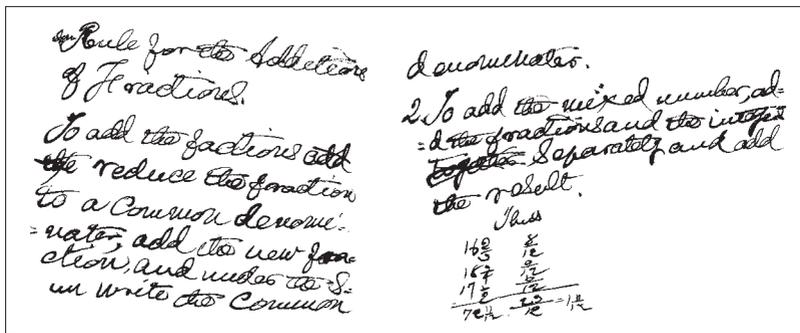
**No. 33** 所在不明である。その経緯も明らかでない。坂上家から寄贈時のリストで算術の英文ノートである事が知られているので、**No. 31・32**に続くノートであった、としてよい。資料番号が先になるが、右のノート類と一連と推察できる二冊のノートを記しておく。

**No. 40** Notes for the rule for the Fractions. と標題。This book belongs to T. Sakanowukey. と表紙に墨書。画像は第一丁のオモテとウラである。速筆のノートで綴りも正確でない箇所が散見する。No. 31・32と同時期のもので、「大算数」の授業ノートと見てとれる。分数の加減乗除法のノートである。既に紹介した教科書の記述内容とは一致していない。

**No. 41** 表紙なく、標題もない。演習問題で、  
 28 A Merchant failing, paid 60% on each dollar of his debts. He owed A \$ 2200, and B \$ 1800 : What did each receive. Ans. A \$ 1320, B \$ 1080. で始つて、<sup>冊</sup>処々に訳語が記されている。**No. 40**と同時期のものと見られる。レイの「大算書」では、これらは



No. 41 ノート



No. 40 ノート

Interest (利息) の項で学ぶようになっていて、No. 34・35・36 の Mensuration の大分前に学習する事になっているものである。「履修證」から二年次後期での履修内容である。

2 原本判明ノート (No. 34・35・36・37・38)

洋学校旧蔵数学教科書中に一冊、破損甚しく、著者、出版事項等、書誌的項目の一部不明のものがあるとされている(『バンド研究』 p.144)。筆者の調べで詳細判明、ジェーンズ邸には平成18年には伝えてある。それは、Elements of Geometry and Trigonometry, with Application in Mensuration. By Charles Davies, LL. D., A. S. Barnes & Company. (以下原本と略)である。

この本の最古版は一八五<sup>嘉永</sup>四年版が知られている (The National Union Catalog, Pre-1956 Imprints, Vol. 134=N. U. C. Vol. 134.) 筆者披閲本の「序文」に一八五一年と年紀が記されていた。この本はタイトルの通り、求積法付、幾何・三角法の教科書である。筆者披閲本の広告頁に一八七<sup>明治</sup>〇年<sup>3</sup>の書名があり、それより少し後の出版と思われる。この書のレベルは当時の大学用よりは低く、実務者用より高度、といった処であろう。

著者 Davies (寛政<sup>10</sup> 明治<sup>9</sup> 一七九八〜一八七六年) は先述の如く、ウエスト・ポイントの数学教授(一八一六〜一八七六年)、ジェーンズがこの学校に在学の頃はコロンビア大学高等数学教授で数多くの数学教科書の著者として有

CONTENTS.	
BOOK I.	
Definitions and Remarks.	Page, 3-16
Arms.	16
Properties of Polygons.	17-37
BOOK II.	
Of the Circle.	38
Problems relating to the First and Second Books.	82-98
BOOK III.	
Ratios and Proportions.	99-131
BOOK IV.	
Measurement of Areas and Proportions of Figures.	132-156
Problems relating to the Fourth Book.	159-113
Appendix—Regular Polygons.	113-115
BOOK V.	
Of Planes and their Angles.	116-130
BOOK VI.	
Of Solids.	132-153
Appendix.	153-164

CONTENTS.		Page.
TRIGONOMETRY.		
Of Lines and Arcs.	142-151	142-151
Of Solids.	154-161	154-161
Deductions and Recapitulation of Tables.	161-169	161-169
Tables.	169-183	169-183
Examples.	184-201	184-201
Application to Heights and Distances.	202-210	202-210
APPLICATIONS OF GEOMETRY.		
Mensuration of Surfaces.	211	211
General Principles.	211-213	211-213
Contents of Figures.	213-243	213-243
Mensuration of Solids.	254	254
General Principles.	254-260	254-260
Solution of Figures.	260-271	260-271
Mensuration of two Bodies.	244	244
To find the Surface of a Cylinder.	244-249	244-249
To find the Solidity of a Cylinder.	249-250	249-250
To find the Surface of a Cone.	250-251	250-251
To find the Solidity of a Cone.	251-253	251-253
To find the Surface of the Frustum of a Cone.	253	253
To find the Surface of the Frustum of a Cone.	254	254
To find the Surface of a Sphere.	254	254
To find the Surface of a Spherical Zone.	254-256	254-256
To find the Solidity of a Sphere.	256-257	256-257
To find the Solidity of a Spherical Segment.	257	257
To find the Solidity of a Spheroid.	257-260	257-260
To find the Surface of a Cylindrical Ring.	260-261	260-261
To find the Solidity of a Cylindrical Ring.	261-261	261-261

名な人物である (The National Cyclopaedia of American Biography. Vol. 3. p.26)。

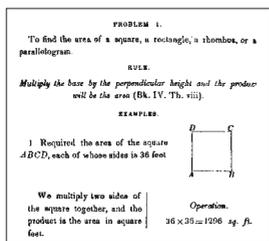
この書は **No. 34**、**37** の原本で、以下、ノートと対比して若干、考察する。最初に目次を示しておく (前頁)。

**No. 34** Definition of Mensuration of Surface and Solid. (平面と立体求積法定解) と標題。原本目次 p. 211 ~ 247 の内容を一ユニットとして学ぼうとしていた事が判る。ノートの中表紙に Application of Geometry. Mensuration of Surface. とあり、原本 p. 211 から書写し始めて p. 240 の中ほどで終わっているが、十六丁のノートに原本を全て書写できる筈もなく要点のみの書写に終わっているし、**No. 35** ノートにも、この部分が含まれている (表紙中央上に **41**)。

**No. 35** Application of Geometry. Mensuration of Surface. と改めて標題。このノートの綴じ方は順序が逆になってしまっていて、終りの丁の方に **No. 34** に入るべき正方形、平行四辺形、長方形や三角形の求積法のノートが紛れ込んでしまっている。原本での、feet yard を使わず、日本の尺や坪といった名数を使ったノートである。日本語を使わなかったジェーンズ自身による授業を反映させるものでなく、後進生教授方による工夫と考えられる。ノートの最初の方は原本目次 pp. 213 ~ 239 の内容のノートであり、一丁目オモテは代数の開平に関するメモである。ノートを再綴する際に逆に綴じてしまったのである (表紙石上



No. 35 ノート



(原本 pp.213~4)

方任取ノ坪ノ角三

$AB = 10.75$  尺  
 $AD = 7.25$  尺  
 問坪 對目ノ高七尺二寸五分  
 答 對目ノ高七尺二寸五分  
 操作 對目ノ高七尺二寸五分  
 $10.75 \times 7.25 = 77.5375$   
 $77.5375 \div 2 = 38.96875$   
 答 對目ノ高七尺二寸五分

No. 35 ノート

Mensuration of Surfaces.

10. To find the area of a rectangle ABCD, of which the base  $AB=45$  yards, and the altitude  $AD=15$  yards.

Here we simply multiply the base by the altitude, and the product is the area.

Operation  $45 \times 15 = 675$  sq. yds.

11. What is the area of a rectangle whose base is 14 feet 6 inches, and breadth 4 feet 9 inches?  
 Ans. 68 sq. ft. 10' 8".

(原本 p.215)

方任取ノ坪ノ角三

$AB = 10.75$  尺  
 $AD = 7.25$  尺  
 問坪 對目ノ高七尺二寸五分  
 答 對目ノ高七尺二寸五分  
 操作 對目ノ高七尺二寸五分  
 $10.75 \times 7.25 = 77.5375$   
 $77.5375 \div 2 = 38.96875$   
 答 對目ノ高七尺二寸五分

No. 35 ノート

PROBLEM 11.

To find the area of a triangle, when the base and altitude are known.

RULE.

1. Multiply the base by the altitude, and half the product will be the area.

11. Find the area of the triangle ABC, whose base  $AB$  is 10.75 feet, and altitude 7.25 feet.

Operation.

We first multiply the base by the altitude, and then divide the product by 2.

$10.75 \times 7.25 = 77.5375$   
 and  $77.5375 \div 2 = 38.96875$   
 = area.

(原本 p.215~6)

に引く)。原本と対比して竹松のノートの訳語を示しておく。base = 「ベース」 area = 「坪」である。「開拓使辞書」では、area = 「平面。平地」 product = 「成端。産物。積(算術ノ語)」 operation = 「術。働き。手術」と和訳されている。ノートの取り方は仲々上手になっている。三年次前期の竹松の学習ぶりを示すノートとしてよい。但、No. 37は明らかに卒業後のノートである。

12 base is 12.25 yards and altitude is 8.5 am 109.125

問坪 對目ノ高八尺五寸  
 答 對目ノ高八尺五寸  
 操作 對目ノ高八尺五寸  
 $12.25 \times 8.5 = 104.125$   
 答 對目ノ高八尺五寸

(15) No. 35 ノート

6. What is the area of the parallelogram ABCD, of which the base  $AB$  is 64 feet, and altitude  $DE$ , 36 feet?

We multiply the base 64, by the perpendicular height 36, and the product is the required area.

Operation.  $64 \times 36 = 2304$  sq. ft.

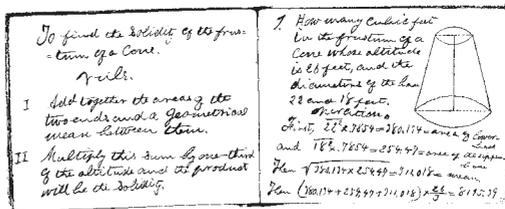
7. What is the area of a parallelogram whose base is 12.28 yards, and altitude 8.5? Ans. 104,125 sq. yds.

8. What is the area of a parallelogram whose base is 8.7 chains, and altitude 6 chains? Ans. 5 A. 1 R. 0 P.

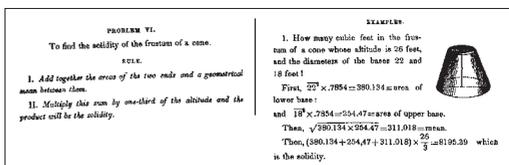
(原本 p.214)

**No. 36** Mensuration of Solids. The mensuration of solids is divided into two parts. 1st. The mensuration of their solidities...と続くのであるが、この Definition の部分は既に **No. 34** ノートに纏めて書写されているものである。**No. 36** は原本 p. 241 の中ほどから p. 250 迄は写してなく、p. 251 から書写が始まり p. 262 の本文終り迄写されている。原本は、次は対数表で終わっている。原本に解答のない設問は書写ノートも空白の俣である。なお、このノートの裏表紙には「立方術」と墨書されている(表紙右上に朱で **6th**)。先述(註2)、『隈本古城史』 p. 46 及び、『新熊本市史』第五巻近代 I p. 468 に載録されているのは、下に示すノート部分である。

**No. 37** Trigonometry と標題。裏表紙には「測量三角術」と記されている。原本 p. 165 Elements of Trigonometry. Introduction. Section I. Of Logarithms. から p. 210 迄書写されている。原本には解法は記されていないが、**No. 37** に「Operation」として解法が記されている練習問題もある。解法付ノートを書写したか、竹松自ら計算した結果を書き遺したものが不明である。ノートの終りの方には、直接計測できない、川向うの二地点間の距離を求める問題がある。参考迄に初めの部分を紹介しておく(表紙中央上に朱で **7th**)。このノートの終わりには注目すべき記述がある。即ち、「Trigonometry is End. Copy this book January 25th.



No. 36 ノート



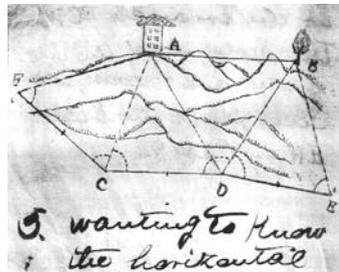
(原本 p.254)

1878. T. Sakanowjye: 明治十年丑ノ一月写之」とある。坂上の英字表記は現在の表記より、よほど発音に近いのも興味深いが、「明治十年」が重要である。

洋学校の生徒の中で基督教を奉じ「奉教趣意書」に署名した花岡山の血盟が明治9年1月末、これにより洋学校は廃校（同年8月）。三級生・竹松も繰上卒業の破目に至った事は先述したが、「測量術」は四年次履修教科ゆえ竹松は、明治9年7月末の繰上卒業後、約半年懸命に「測量術」の教科書を書写して勉強した証拠が、このNo. 37ノートである。

洋学校閉鎖時の数名の有志生徒が初志の断たれるに忍びず、福島綱雄（竹松と同じ三級生。熊本の尚綱学園第二代校長）を中心とする教師名義にて、かつて洋学校にあった洋書の貸与を請うて極めて小規模な洋学研究を開始した、とされている（『熊本県教育史』上巻 p.487 『熊本英学史』 pp.169～174の花立三郎論考参照）。竹松が、この一員であった事はNo. 50<sup>17</sup>「雑記帳」が明らかにしている。No. 37ノートが存在する所以である。

No. 38<sup>18</sup> 第一丁オモテにElementary Algebra Chapter 1st: ...のペン書（墨）されている。「坂上蔵本」と陽刻の方印があるが表紙に「桂?」と読める小篆の印も押されている。二年次後期から三年次前期にかけてノートと見られるが、竹松のこれ迄見てきたノートの文字とは別人の手になると見てよい。「桂?」という印を使う人物（特定できていない）のノートが竹松の有になったと、押印の関係からも、見られるノートである。このノートにも



No. 37 ノート

5. Wanting to know the horizontal distance between two inaccessible objects *A* and *B*, and not finding any station from which both of them could be seen, two points *C* and *D*, were chosen, at a distance from each other, equal to 200 yards; from the former of these points *A* could be seen, and from the latter *B*, and at each of the points *C* and *D* a staff was set up. From *C* a distance *CF* was measured, not in the direction *DC*, equal to 200 yards, and from *D* a distance *DE* equal to 200 yards, and the following angles taken,

$$\text{viz. } \begin{cases} \angle AFC = 88^\circ 00' & \angle BDE = 54^\circ 20' \\ \angle ACD = 58^\circ 30' & \angle BDC = 166^\circ 25' \\ \angle ACF = 64^\circ 31' & \angle BED = 88^\circ 20' \end{cases}$$

Ans. *AB* = 845.467 yards.

(原本 p.210)

原本がある事を記しておく。即ち、  
 New Elementary Algebra. Embracing the  
 first principles of the science. By Charles  
 Davies LL. D. professor of higher mathe-  
 matics, Columbia College. 1872. A. S. Barnes  
 & Company. である。この書の pp.33~114を書  
 写している。

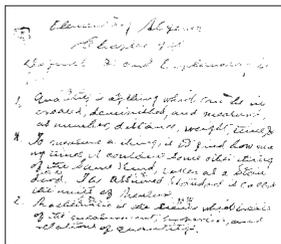
英単語帳 (No. 42・43) と教科書

既にNo. 43については少し触れたが、ここで画像で紹介しておく(精査し切れていない)。

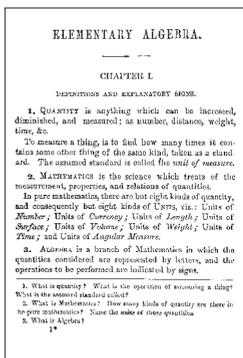
No. 42 (第一丁オモテ)

最初に Introduction Nebular (星雲の) と単語が見えるのであるが、洋学校での星  
 学教科書の単語帳ではない。星学教科書は

Fourteen weeks in Descriptive Astronomy. By J. Dornan Steele. Ph. D., principal of  
 Elmira Academy, author of "A Fourteen Weeks Course in Chemistry." — "The  
 heavens declare the glory of God; and the firmament showh his handy-work." Psalm  
 XIX. 1. — New York: Boston: .1871.である。他の単語が、この教科書からは続いて  
 見られないからである。この教科書は扉に「詩篇」の文言を引き、神の力と栄光を讃



No. 38 ノート



(Davies' New Elementary Algebra. p.33)



えているが、宇宙の神秘は神の働き（…the limitless expanses of that space in which God is working the mysterious problem of creation. p. 274）といった文言や、この宇宙の仕組みを創造し維持している神の心は量り知る事ができない（p. 283）といった文言が、この教科書には、ちりばめられているのである。それがあらぬか、「ジェーンズは…（生徒が英語を理解するようになった三年生の頃）天文学を教授する際、宇宙の洪大無辺なる事や秩序整然たる事を示して、此天地は偶然に斯く成立した物であるうか、何者か之を主宰する者があるのではなからうかと云ふ如き質問を起し、天地の神秘を以て信仰の自然なる事を語り、又或時は歴史や英文学を教めるに当り、欧米文明の基礎は基督教の信念にある事を述べて聖書を理解するの必要を示し、…（聖書を学ばんとする生徒は一週に一夜自宅にて之を教へてもよいと勧誘した」とある（小崎弘道『七十年の回顧』 p. 17）。

竹松は繰上卒業ゆえ、天文学（星学）をジェーンズから、このような形で教えられたか否かは不明である。

この **No. 42** は窮理書の単語帳かも知れないと調べてみた。洋学校での窮理書は（一）に、Thomas Tate の *First lesson in philosophy, or, The science of familiar things: revised and improved by C. S. Cartee. 1856.*（日本に三本は現存）とされているが、この窮理書の単語帳ではないようである。同書 pp. 93 ~ 99。なお、『バンド研究』 pp. 144 ~ 145 参照。p. 145 の *Cartil* は誤植。次の（二）も同書。（二）に、*Chambers's educational course of Natural Philosophy* の二巻本とされている。この書の Vol. 2 には、*optics*（光）*astronomy*（天文）*electricity*（電気）*meteorology*（気象）が内容である。（Vol. 1 は、物体と連動 機械・構造と装置 静水流水気流 音響が内容）この書は日本に四本は現存）。Vol. 2 の *astronomy* を一瞥してみたが、この単語帳にある *Nebular* という語は、この書で取上げている *Sideral Astronomy*（恒星天文学） pp. 99 ~ 100 では検出できなかった。この書の単語帳ではないと推定される。筆者が披閲したのは「開成所」の角印（陽刻 一吋八分Ⅱ五・八cm角）の蔵書印のある京大本

で、これは明治3年5月設立の大阪開成所（同5年8月の「学制」頒布迄存続 その後 変遷あり 明治19年第三高等中学校 明治27年 第三高等学校 昭和24年 京都大学となる 但 同25年迄存続）のもので、当時、関西で最高の洋学機関が所蔵するものと同一の「窮理書」を熊本の洋学校でも用いていた事が判る。

**No. 43** 既に「六 竹松の履修科目」で若干、触れておいた。表紙に「Chemistry」と墨書。

下の画像については教科書 (Steele's New Chemistry) のどの頁の単語なのか精査して特定できていない。単語帳第六丁のウラは、教科書 p.67の Charcoal is made by burning piles of wood, so covered over with turf as to prevent free access of air... から引いた単語で、第七丁ウラは p.78の Compounds. から引いている。第十一丁ウラは p.106の bleaching powder (おしろい粉) = Calcium Hypochloride からである。第十三丁オモテは p.113の Sulphur = Sulfur (硫黄)



(第一丁 オモテ)

から、同ウラは p.145の Spectrum Analysis. (スペクトル分析) から、第十八丁オモテは p.156の Zinc (亜鉛) から、それぞれ単語を引いている。第十九丁オモテは p.124～125あたりに戻って Arsenic (ヒ素) の箇所の単語を引いている (第二七～二九丁は綴が上下逆になっているので綴じ方が崩れている可能性がある)。第二一丁オモテ・ウラは p.184～185の Starch, Woody Fiber, and Sugar から引いている。この **No. 43** の単語帳も精査すれば、洋学校での化学の学習法が少し具体的に判ってくるだろう。

この化学の教科書の酸素の項に *O the Common Scavenger. - God has no idlers in his world... There is not*

extra particle in the universe. (酸素 この世の掃除屋 神は世に無意味なものを造ってはいない 世界にはいくら小さなものでも余分なものなど一つもない といった意か) といった文があるが、この書中の文言 (There is no chance work in nature.) と、ジェーンズの説明せる「ゴッド」こそ造物主と思念して奉教者となったのは、宮川経輝である (同氏「追憶」『日本ニ於ケル大尉ヂエンス氏』 p.135)。この事に触れ、「余も同様」である、というのは海老名弾正である (『海老名弾正先生』 p.82)。

この辺りの事について、吉田作弥が受洗した事を知った父から棄教しなければ殺すと迫られた事を叙述するくだりで、青山霞村は「当時彼等は神学や基督教会の歴史も典禮も知らず、ただ天地に唯一の神があつて人間の父であること、そして天父が人間の罪を救ふため、独子の耶穌基督を遣ふし玉ふたといふ単純な教義に感激したので、殉教の事を知らなんだ：」「ジェーンズに相談したら「教のために殺される、そんな尊い事はない、帰ってお父さんに殺して貰へと卓を叩いて激励した：」と記している (『同志社五十年裏面史』 p.55 昭和6年 からすき社)。

## 九 中西牛郎と竹松

### 竹松自筆履歴書 (次頁)

竹松の生年は万延2年である事は既に述べておいたが、洋学校卒業後、二年間は繰上卒業によって充分学習できなかつた数学等を研鑽し、家業に専念するようになる迄の明治25年5月迄、教職に就いていたのである。次の「坂上資料」No.61、65によって記しておく (当時の小学校教員の実態を知る一史料でもある)。

明治廿年九月九日 高等上益城小学校生徒教授依頼 月俸拾円支給 熊本県

上益城郡役所 (註 御船町一丁目) にあり 二年制 (五 六生相当) 下益城郡役所

明治廿一年四月廿八日 高等上益城小学校依頼願退職 上益城郡役所

明治廿一年八月三十日 熊本区高等熊本小学校校授業嘱託シ為報酬月手当拾円給与

ス 熊本区役所

明治廿二年四月一日 自今月俸拾貳円給与ス 熊本区役所

明治廿五年五月九日 小学校実施ニ付熊本小学校校授業嘱託ヲ解ク 熊本市参事会

### 中西牛郎と神水義塾

竹松は右の小学校教員として奉職する前に、明治11〜19年迄の八年間、中西牛郎（以後 中西と略）の神水義塾で英語教師として、その力を發揮していた。この時期が、竹松が洋学校で培った英語の力を最も揮う事ができたと推察される。同志社に関わる事もあるので触れておく（神水は熊本市内の地名）。

中西について、その「文章は鮮麗比なく…大江義塾の徳富蘇峰と相對峙して蘇峰、蘇山（中西蘇山と号す）何れが大となすかと囁目されてゐたが、惜しいことには蘇山は早く世を去つた」とある（『肥後文教とその城府の教育』 p.382 山本十郎編 昭和31年 非売品 但 徳富は大江義塾時代は蘇峰と号していない）。

神水義塾は『熊本県教育史』中巻 p.297（熊本県教育会 昭和6年）によれば、「第四期新設私学表」に「塾主中西牛郎 設置明治十九年十二月六日 廃止明治廿二年八月十四日」となつてはいるが、明治19年以前にも塾は



(坂上家提供)

存在していたのである。竹松の履歴書にある如く、明治11年には存在していたといえる。然し、中西の京都遊学（同志社での英学修学も一目的）の爲め、塾廃止となり、竹松は止むなく小学校教員へと転身したと考えられる。当時、中西は竹松のように本格的に英学を学んではないので英学の力は竹松の方が中西よりはるかに上であった、といえる。

中西については、上河一之論考「教育宗教衝突論争」と中西牛郎『近代熊本』No.29（05年9月 熊本近代史研究会）及び、荒木精之『熊本県人物誌』（昭和34年 日本談議社）参照。中西と天理教の関わりについては、天理大学・金子圭助教「中西牛郎の天理教学研究―天理教教理史研究の一齣―」『天理大学学報』第一〇二輯（昭和51年3月）で詳細に論考されている。

### 中西と同志社・天理教

彼が明治20年代より前に、同志社で学んでいた事は次の「序文」中の自歴から明白なのであるが、これを裏付ける史料は同志社の文書類では未検出である。前掲、荒木精之の如く、中西は基督教を学んで基督者にならず、であり、また、西本願寺に見込まれて当時の五百円という大金で米国に宗教の研究に行かせてもらい、帰国後は西本願寺文学寮の教頭を務めて、仏教擁護の論陣を張っていたのであるが、やがて、仏教会の腐敗墮落を攻撃、西本願寺を去るに至っている。明治33年、天理教団に招かれていた。教派神道の独立教派としての公認を得る為の、教義の整頓に宗教学者として招かれたのである。明治41年、天理教は教派神道十三派の一つとして公認（戦後は教派神道色を払拭）。明治35年には、天理教教祖・中山みきの伝記『教祖御伝記』を編述しているが未刊に終わっている（不充分との声からか）。昭和2年、天理教信者となり同<sup>一九〇〇</sup>5年10月18日、七二歳でこの世を去って

いる。

以下、中西自らが死の前年、昭和4年に語った経歴（自歴）である（中西牛郎『神の実現としての天理教』「序文」昭和4年 平凡社）。

「…私は幼年時代既に漢學の幾分素養を以てゐましたが進んで青年時代に入りますと、時代の影響を受けて英學を修めたいといふ熱心が漸々高まりました、これが爲に一年程東京某英學塾に入學しましたが、學資が續かないので郷里に歸り、或人の勧めにより長崎大浦の英國監督教會教師のモンドレルといふ方に日本語にて四書を教へて其代りに英語を勉強させて貰ふといふ條件の下に長崎に行きましたが、こゝでは思ふ様に修學が出来ませんので、畏友徳富猪一郎氏及び恩師下村孝太郎氏の盡力により京都同志社學校に赴き同校教師ゴールドン師から學費を出して貰ふことになりました。然るにゴールドン師の申すには、無條件で學費給與といふ事は私があなたに恩になつて面白くありませんから何かあなたに仕事をお頼みして報酬を上ぐる事を被するやうとしませうとて、一冊の書を取り出しこれを翻譯して下さいと申しました。其書はトーマス・アースキンといふ人の書いたキリスト教内證論でありました。當時學力程度の低級な私にはこんなむづかしい書を翻譯する事は出来ませんと申しましたら、ゴールドン師は毎日一行でも二行でもあなたが解つたやうに翻譯されるれば結構ですと申しますので、それならばと私は直ちに同志社學校に入り一年滞在の中にどうかかかつか書を書き翻譯して頂きました。私が極めて深遠なるキリスト教の知識を得ましたのはこれが爲であります。

私は同志社在學の中にも暇があれば西本願寺の赤松連城師や東本願寺の南條文雄師などを訪問して佛教の話聞き、これが又私に佛教研究の端緒となりましたので、郷里に歸つてから父に相談して神水義塾に東本願寺派の若き僧侶林悟といふ方を招聘して生徒一同と共に俱舍唯識の講義を聴く事にしました。

斯くして私は佛教とキリスト教との根本觀念を掴みまして、佛教を取らんかキリスト教を取らんかといふ岐路に立ちましたが、終に佛教を取る事に決心して明治二十年に宗教革命論<sup>(2)</sup>と題する一書を書きました。此原稿は郷の先輩佐々友房氏の慫慂によつて東京の博文堂に出版を托しましたが、其後二三ヶ月を経ますと京都の赤松連城師から至急上京するやうにと書面が参りました。私は二三の塾友と共に上京して赤松師に面會しました處、あなたの宗教革命論が非常な評判となり、法主大谷光尊上人（光瑞師の父）にも是非一度遇ふて見たいと仰せらるゝので呼びした次第でありますとの事で、私は此時始めて、私の拙稿が既に出版されて世間に讀まれている事を知りました。乃ち赤松師及び大洲鐵然師の紹介によつて光尊上人に面謁しますと、難有獎勵の言葉がありまして、赤松師から更に上人に申上げて私を歐米に留學させて貰ふ様に執成してくれました。

私は郷里にも歸らず此京都に滞在し居るオルコット氏から米國紐育神智學會支部長ヂヤツヂ氏に宛てた紹介狀を貰ひ、これを携帶して米國に渡りサンフランシスコに暫く滞在して、然る後に紐育に赴かんと同地にて二三の米人に就き専ら英作文を學習し、さてこれから東部に向つて出發せんと支度してゐます間際に、至急歸朝せねばならぬ事情が國元に起りまして歸國しました。すると本願寺からは是非文學寮の教頭になつてくれといふ依頼がありまして、それから京都に二三年間滞在勤務してゐますと、フランス歸りの藤島了穩師が寮長となり私と藤島氏との間に不圖した事から意見を異にする問題が起り、之を導火線として文學寮内に藤島黨、中西黨が発生して相反目し、終にエライ騒動になりましたして學校も閉校した……」。

中西の墓標は、天理市の天理教会本部豊田山の墓地の中で教祖を中心とする天理教団のお歴々とは、少し離れ

た高安教会の墓域の中に、神道様式の先の尖った形で静かに立っている（筆者  
畏友・前田史夫氏 平成18年頃撮影提供 「十月十九日帰山」とあるのは埋骨  
の日）。中西については後考を俟つ次第である。

## 十 おわりに

「謂はゞ、洋学校は熊本文化の中心であった。…洋学校の生徒は熊本県下の俊才を集めて選抜したもので、  
童の集まりであった。『あの子が洋学校に行くのか、それなら私は行けない』とて、洋学校の生徒は尊敬された。  
…洋学校の生徒は、外の青年より身綺麗にしてゐた。書物、インキ、ペンなど、悉く藩費にて支給された。我々  
は厚遇されて、別天地にある念がした。高い所へ上つたやうに感じた。洋学校生徒は垢抜けがして、美少年の寄  
合で、学校は貴公子の学校であるやうに世間からも思はれた。…洋学校の生徒は、他人の学び得ぬものを学んで  
いるとて、新時代の寵児を以て、遇されていた。…」（『海老名弾正先生』pp.73〜74）と、海老名が回想し記して  
いるが、竹松はまさに、この洋学校に学んだ英才である。

彼は八歳にして維新の激変に遭ひ、十三〜十六歳（明治6〜9年）の間、撰ばれて洋学校に入り熊本の近代化  
の胎動の真つ只中に身を置いて、その息吹を全身で感得、洋学校廢校による繰上卒業の学力不足を補うため自学、  
息つく間もなく、西南戦争（同10年）の惨禍に直面、荒廢した熊本城下から立上らんとする若者の教育に力をか  
している（神水義塾）。写真嫌いで、肖像写真は残されていない。派手を好まない含羞の人といふべきなのであ  
ろうか。家郷での瓦生産を天職としたのである。



洋学校といえば、基督者となつた熊本バンドの事歴が余りにも有名である。ジェーンズが熊本に基督教を根付かせんとしていた事は杉井論考が明らかにしている(杉井 77年 pp.20~23)。結果、「此ノ教ヲ皇国ニ布キ大ニ人民ノ蒙昧ヲ開シ」即ち、西教(基督教)の公明正大(恐らく平等性も)を明らかにして人民に伝えて蒙を開き、この教えを布き、以て国に報いんと盟約・宣言する洋学校生徒も現れたのである(「奉教趣意書」明治9年1月29日 30日でなく『バンド研究』の辻橋三郎説による)。

然し、このような盟約・宣言をする事なくジェーンズの教えを胸に刻んで社会の各方面で活躍した人々の方が多かったのである。洋学校に在籍したのは約二百人(『100周年記念展パンフレット』p.44)、そのうち、基督教に入信したのは、後に入信した人を含めて正確に何人であるかを筆者は確認し得ていないが明治9年4月3日、ジェーンズによって受洗した者は二二名とされている(『バンド研究』p.205)。「奉教趣意書」署名は、花岡山に登つて盟約せんとした者四十人ほどのうち、三五名。但、ジェーンズが宗派的基督教を布教するだけの存在でなく、熊本の近代化、殖産、民生の向上等々のため力を尽した存在であつた事はいふ迄もない。また、布教のみを事とする宗派組織を痛烈に批判した人物でもある。

竹松は右の盟約・宣言等を行った人々の一員ではなく、師の教えを静かに実践した一人である。地道に家業に励んだのである。師のゆかりの品々―肖像写真等が寄贈後、行方不明になる等の事はあつてはならない事である―を大切にし、家人も、それを知るゆえに守つて来られたのである。坂上家にはジェーンズからの種子で育つたアカシヤ(染色用タンニン<sup>21</sup>)を採るモリシマアカシヤか 昭和20年代後半頃 台風にて倒木)や、ノグルミ(実樹皮は染料となる 昭和50年頃倒木 株が残る)が植えられていた。ジェーンズが熊本の殖産や民生のための尽力した生きた証拠だったのである。

竹松の、師・ジェーンズへの変らぬ敬愛の念は、師の永眠（天保一八三七年3月27日～明治一九〇九年同日 享年七二）後、同43年5月に遺族へ弔慰金一、三三七円余を醸出した四七名の中に彼の名（弍円）がある事によっても判るのである（早稲田大学史資料センター蔵「浮田和氏文庫」ⅢA・55-12 前掲 石井 p.237 但『バンド研究』p.618では「4月27日）宮川 岡田に託しゼーンズ遺族見舞金二千円」とあるが典拠不明で検証不能）。

弔慰金の寄附者総代は小崎弘道、浮田和氏、横井時敬、岡田松生である。寄附者の中にはジェーンズに学んで基督教に傾かなかった水前寺派（正義派）の名も見える。吉田作弥（一〇〇円 後 入信）、高道竹雄（一〇〇円 後、入信）、横井時敬（五〇円 農学・農政学者）、福島綱雄（五円）、太田黒哲堂（一〇円）がそうである。寄附者の殆どは洋学校出身であるが、出身でない神田乃武（なほぶ三円 英学者）や、折田彦市（よしち一〇円）の名がある。「奉教趣意書」に署名したが、後に基督教から離れた徳富猪一郎（一〇円）や、基督教に当時、懐疑的で署名しなかったが、やがて基督教者になった和田正脩（二五円）や今回の総代の一人小崎弘道（一〇円）、の如き人もいる（ジェーンズによって明治9年4月3日 二人は受洗 『バンド研究』 p.205）。最高は当時の細川侯爵家（三〇〇円）である。熊本に対する彼の功績を十二分に感謝しての事といえる。

ジェーンズが三高を去るに際しての三高生の惜別の辞に彼の人柄が偲ばれるものがある。

「○ゼンス教師を送る…先生の我校にある僅に二年、然かもその教習感化の大なる、吾人はその鴻恩に対し、感謝の情切なるを覚ゆ、…その吾人を教ゆるや、恰も勇士戦場に起て、士卒を激励するが如く、謹言熱意以て之に当られしかば、衆皆其風を景仰し、先生に対する、恰も慈親の感ありき…」とある（『嶽水会雑誌』第三号「雑報」pp.61～62 明治32年12月10日 第三高等学校嶽水会 記念にスタンダード大辞書を贈っている）。

彼の母校であり（文久元一八六一年卒）教員でもあったウエスト・ポイント教育の真髄は、その精神（mind）にあり、

この精神は出身者の人物像と行跡を知る事によって理解できるもの、とされている（『The Military Academy at West Point』 American Journal of Education. Ed. H. Barnald Vol. 13. 1863. p.17.）。

ジェーンズが熊本で（旧三中・三高でも）示したものは、このウエスト・ポイント精神で、これが自ずと洋学校生徒や彼に接した人の心に響き、彼は敬愛される存在となったのであり、基督者にならなかつた多くの人も共に多額の弔慰金を遺族に寄せる事になった、といえる。この弔慰金醸出時の同志社は原田助社長時代で、原田は洋学校最後の撰入生（五級生 明治8年9月始業）であり、洋学校在籍一ヶ年で廃校<sup>註</sup>となったのでジェーンズと接する時間は多くなかつたのであるが、醸出金は一五円である。

草創期の同志社を中核となつて支えた熊本バンドの、生みの親・ジェーンズに対して、同志社が組織として弔意を表する、といった事は考えられないが弔意を表した四七名中（四〇名が洋学校出身者）一六名が洋学校出身の同志社人である事を特記しておく。

以上、静かな市井の人となつた一洋学校出身者・坂上竹松の事歴と、それによつて浮んできた洋学校教育の一端である。この小文が「坂上資料」の貴重さを伝える一石となり、御批正を得て洋学校研究の深化への契機ともなれば、まことに幸いとするものである。本稿は煩ではあるが文献等を以て記する、という形を採つたが、それが史料が参考文献かの別は記さなくとも明らかなので略した。煩の事は客観性の観点から御許し願う次第である。

〔謝辞〕 本稿の大半は平成18年中に成つておりながら病で果たせなかつたので今回、全面的に改めたものである。当時、「坂上資料」の寄贈を決断された坂上ヨシ子女史も御健在で旧稿には記しておいたが、書改めねばならな

くなった。この小文を生前に献呈できなかつた事を御許し願うのみである。

多くの方々、心からの御助力があった。今回は特に、坂上征さん、熊本市文化振興課の皆様にも多大なる御力添を頂いた。記して深甚なる謝意を表する次第である。

平成27年9月

## 註

(1) ジェーンズ邸は三度、移築されている。現、水前寺公園内には昭和45年一九七〇に移築復元されたのである(山内光臣論考)『隈本古城史』pp.485~498。

竹松が、十三歳時購入後いつ、「Bad Book」と書入れたかは不詳であるが兵の書に、かかる文言を記するに至つたのはジェーンズの感化以外には考えられない、としておく。ジェーンズは熊本での、農を中心とする殖産による富国を説き、実践して見せ、労働の貴さを述べ、そのためには智と徳を供えた人民を育成する教育こそが最も大切である、と繰返し訴えた事で知られているが(『生産初歩』『洋学校教師祝文訳』)、その感化の表れ、といつてよい。

(2) 竹松のノートには洋学校在学中のノートのみでなく、明治9年7月末日での繰上卒業後、研鑽筆写したノートも存在するが、ここに紹介されている数学ノートはCharles Davies, LL.D.のElements of Geometry and Trigonometry... p.254を墨書したものである(後述)。同一のノートの画像一点が『新熊本市史』通史編第五卷 近代1 p.468(平成13年)に紹介されている(この時点では「竹松資料」は熊本市蔵 となり県立第一高校から移っている)。

(3) 坂上征さんの御厚意にて筆者は坂上家の「家記」、竹松自筆の履歴書等々を拝見し得た。御母堂・ヨシ子女史は平成24年11月8日、百四歳の天寿を全うされた。「坂上資料」寄贈時の、その御手紙の文章、文字は実に見事なものである。御母堂の決断がなければ「坂上資料」が世に出る事はなかつた、といえる。

(4) この姿こそジェーンズのウエスト・ポイント精神(後述)の竹松への感化といえる。

(5) 物次郎(天保2年11月7日一八三二〜明治29年7月23日一八九六) 享年六五)は明治16年10月10日隠居、家督を竹松に譲っている。竹松は明治25年には教職を離れて本格的に家業に専念しているのである。

「坂上資料」の中に、惣次郎の算術ノート十三点含まれているが、当時の在郷素封家が学んだものの一端を知る資料といえる。益城町小池（旧小池村）は鯉手永（肥後藩の行政区劃 郡と村の間 明治3年に手永は郷と改称）後述、徳富猪一郎の母・久子の矢鳥家は隣りの沼津手永の杉堂村（現・益城町杉堂）。彼は洋学校在学中、休暇の折、母の実家への往還に、竹松の坂上家に立寄り、時には宿泊した事もある、と坂上家には伝えられている。竹松にとって蘇峰は身近かで関心のある存在であった、といえる。

(6) 益城町の杉堂は、先述の如く、徳富猪一郎（蘇峰）の母・久子の実家・矢鳥家があった所で猪一郎は、この家で生れている。久子の姉は竹崎順子、妹には、横井小楠夫人・津世と矢鳥楯子がいる。

(7) 水野頼山については、『益城町史』通史編 p.6（平成2年）。高野直之『郷土史談益城の華』pp.51～56（昭和3年）参照。他に『御船町史』p.372（平成19年）。『御船小学校百周年記念誌・みふね』p.69（昭和50年）及び、『益城町立飯野小学校百周年記念誌・飯野』p.19（昭和50年）参照。

(8) この公文類の中に、同志社史の初期の伝説となっている人物・山崎為徳自筆の口上書が含まれている。明治6年2月3日付で、これ迄の無月謝は心苦しいので、今年一月からは皆と同様、費用（一人扶持）を納めたい、とする内容である。他に一点、洋学校幹事役の野々口為志の山崎に対する記述や、熊本バンドの氏名がでてくる文書等がある事を特記しておく。

(9) 頼山の教え子は五人、洋学校を志願したが、合格したのは出田と竹松の二人である。北村信篤は当時、仲々の偉材と目されていたが洋学校には進めなかった。後、彼は宮内大臣秘書官となっている（『益城町史』通史編 p.6）。

(10) 成績順位の初出は、『同新聞第一号』（明治7年9月6日）「学校録事」の「明治七年甲戌七月試験各科比較表」である。「初年生（註、一級生）辛未八月始業 第三周年卒業（註、第三周年＝第三年次で一年を二学期に分けたセメスター制）」で「算課代數、窮理書、作文、英語」の卒業（合格）者名が列記してある（成績順）。山崎為徳、小崎弘道、伊勢時雄、横井時敬、森田久万人、浮田和民といった名がみえる。「後進生教授方初年生ニテ二」として、小崎、伊勢、森田等の名が記されている。

『同新聞第二号』（明治7年9月13日）「学校録事」に「第一号に記載セシ洋学試験ノ続」、「二年生始業 第二周年卒業」として「大算書代數、地理書、作文、英語」についての卒業（合格）者名が成績順に列記されている。市原盛宏、宮川経輝、海老名喜三郎、金森通倫、下村孝太郎、加藤勇次郎、不破唯次郎、和田正脩 等の名が記されている。上記のうち、加藤、和田以外は「後進生教授方二年生ニテ三」となっている。

(11) 『バンド研究』 p.32の、三級生「学業成績序列生徒名」に誤植が散見するので、「」内に正字を記して訂正しておく。

「植村〔原〕」「福〔稲〕富」

「小算書」欄で「村松（時直）」の次にあるべき「坂上（竹松）」が脱落。

竹松の三級生は入学時には三名であるが一年後（明治7年9月）には二六名に減っている。退学の内訳は、事故一、洋学不応一、追校（罰責）一、病氣七である。

(12) 印は竹松「履修證」と同じ。なお、下村には八月四日付で熊本県庁発行の卒業保證書<sup>マ</sup>が発行され、遣っている。他の卒業生も同様と推定してよい（下図）。

(13) 素数 (prime number) として現在は1は含まない。Unity (1) を使うRayの方が良いのか。

(14) 1パイント (pint) ≡  $\frac{1}{4}$ クォート (quart) ≡  $\frac{1}{8}$ ガロン (gallon)、米国では0.47ℓ、英国では0.57ℓ。

1ブッシュェル (bushel) ≡ 8ガロン。1ペック (peck) ≡ 8クォート ≡  $\frac{1}{2}$ ブッシュェル。

(15) 竹松ノートの、問2・3は原本での(7)、(8)である。(6)は右のノート右上にメモ風に図のみが写されている。問題を適当に取捨している。答の、

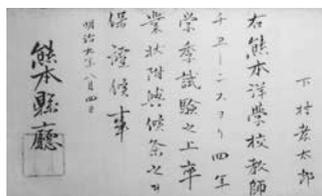
$$A = \text{Acre} \quad \text{H} = \text{H} \quad \text{R} = \text{Rood} = \frac{1}{4} \text{acre} = 40 \text{ square rods}$$

$$1 \text{ chain} = 4 \text{ rods} = 66 \text{ feet} \quad 1 \text{ square chain} = 16 \text{ sq. rods}$$

$$40 \text{ square rods} (40 \text{ perches}) = 1 \text{ Rood} \quad \text{op.} = \text{of Perches} \quad 1 \text{ perch} = 25.3 \text{ m.}$$

(16) 福島（安政5一八五八〜大正14年一九二五）の洋学校時代の成績は抜群であった。広取学校では一人で英語と数学を教え、後、県立熊本中学校や済々黉でも教えたが明治21年10月には同志社に転じ同26年頃京都から熊本に帰った、とされている。彼は、花岡山血盟の一同とは考えを異にする水前寺派（正義派）の一人であって、基督者にはなっていない。同志社にいた頃、新島襄が夫人・八重に頭があがらず、履物を揃えている姿を見て憤慨しきりであった、と伝えられ、同志社から外国留学の話もあったが、基督者になる事を拒否したので実現しなかった、といわれている（『尚綱学園百年史』pp.57〜58 平成元年）。

彼は同志社普通学校（尋常中学校相当）のArithmeticの教師として明治21年9月から招かれている。当時、同志社は一年三学期制で秋学期（9（10）〜12月）、冬学期（1月〜3月）、春学期（4〜6月）であるが、明治21年の新学年から同志社の教員となり、すべにAlgebraも教え、翌22年の新学年からはmathematic担任となり、同26年9月（新年度）からはMathematical



(同志社社史資料センター蔵)

Department の部長になつた (『Doshishu Faculty Records 1879-1895』04年 同志社社史資料室)。

明治26年10月、突然、同志社を辞している。辞する前の四ヶ月間ほど、同志社女学校専門科で幾何学の教員でもあった (『同志社女学校期報』第一号 『同志社百年史』資料編一 p.588・598・627・789)。同志社以外の経歴は、下田一喜『熊本県教育界と人物』p.191 大正3年参照。

(17) 熊本の教育史 (英学史) に重要な史料と推量される。即ち、内容から福島綱雄らが洋学校廃校後に、その蔵書を借用して、繰上卒業による修学不足分を補った、いわれている事を裏付けるものである。竹松の「雑記帳」に記されている事は竹松も福島と行動を共にしていた、という証としてよい。その第一丁オモテ・ウラを以下に示す (第二丁は墨付なしで第三丁以下は種々の史書等の難解語句の読みと意味を簡単に墨書したものである。本紙二四丁、墨付二二丁、表紙ウラ墨付)。

洋書洋措数及ビ名 為覚扣座	
一 人体書	一本
一 星字書	一本
一 化学書	一本
一 歴史	一本
一 點算書	一本
一 英和対訳辞書	一本
一 測量三角術	一本
一 大算書	一本

(オモテ)

一窮理書<sup>三十一冊</sup> 一本

メ九本

右明治十年十二月拝借仕候分

一英文典<sup>四十一冊</sup> 一本

一第五課程書<sup>三十四冊</sup>

一文学書<sup>無冊</sup> 一本

メ三本

右明治十一年新二月

証書ヲ渡シ而テ拝借仕候

分

(ウラ)

この「扣座」は日付から、広取学校の実質的開設（明治10年10月頃）の直後に竹松が個人的に借用して学習したものと考えられる。翌11年2月に新たに三冊借用したのである。この事はNo.37ノートの最後の書込み「明治十年丑一月写之」から考えて、借用前は廃校後の洋学校で書写していた可能性がある。西南戦争で薩軍が熊本城下に攻込むのに備えて城下の民家の焼払い（射界の清掃）が同10年2月19日、天守閣の焼失が同日正午頃～午後3時頃、といった緊迫の事変の直前、嵐の前の静けさの中で書写、と推量される（廃校後の洋学校校舎を借りて 熊本での洋学教育を継続せんとする野々口為志 嘉悦氏房 山田武甫らの計画が この戦乱等で実現しなかった事及び 広取学校については『熊本英学史』 pp.165～185の花立三郎論考に詳しい）。

竹松の、西南戦争終結（同10年9月24日）直後から戦禍をかくぐって学問をすべく、広取学校に足を運んでの教科書の借用、といった姿も浮んでくるのである。

借用書籍の「十二番」等の番号は『バンド研究』での、洋学校旧蔵同一書籍に記入されている番号とは異っている。窮理書の「三十一番」は『バンド研究』では「第九十四番」と「第十九番」である。同一書籍が複数存在した、という事を明らかにしている。竹松の借用した番号の書籍の、その後の所在は不明である。借用書籍のタイトルは本稿の、竹松のノートの論考に於て大略、明らかにしておいたが（『バンド研究』杉井論考 pp.137～145参照）、「點算書」は Davies の New Elementary Algebra : Embracing the First Principles of Sciences. 1872 と推定される。點算は algebra（代数）の事である。「英文典」は『バンド研究』の「リニーニ―文典 第四十六番」に相应するものと推定される。The Principles of English Grammar, comprising the substance of all

the most approved English Grammars extant, briefly defined, and neatly arranged : with copious exercises in Parsing and Syntax. By William Lennie... 1848.

(18) 英文上部の訳語は「開拓使辞書」によつてゐる。数学用語では「多サ quantity = 数量」「徴候 Symbols) = 記号」「助力 coefficient = 係数」とつた処である。

(19) 竹松は、訓導若くは、或る限られた教科を教える準訓導の、正式小学校教員免許状を持たない、後の代用教員に当たる授業生といった存在だったと推察される。明治23年10月6日の勅令による小学校令が同25年から全面实施となり、教員資格も段々と厳しく整備、規定されていく中で淘汰、解任に至つた可能性も考えられる(但、熊本の「県政資料」には、これを示す具体的文書は未見、『明治教育制度発達史』第三巻 p. 789以下参照)。なお、この頃、彼は熊本市内新屋敷町に居住していた事が、辞令の送付先から判明している。

高等熊本小学校(熊本高等小学校)は明治18年、熊本区千反畑町に新築の高等北辰校が始まりで、明治21年9月16日、手取本町の旧、熊本医学校跡地に増築移転している。竹松は此所で教員生活を送つていたのである(『新熊本市史』通史編六 pp. 295~296)。熊本区は、明治11年7月22日布告の地方三新法の一つ、郡区町村編成法によつて、同12年1月20日、熊本区となり、同22年4月1日に熊本市となっている。

(20) 『宗教革命論』は明治22年 博文堂(東京)発行。

(21) ジェーンズはセイウアカネの種子、八〇ポンド(三六kg)をパリから米國經由で取寄せ、染料製造に取組んだりしている(『ジェーンズ熊本回想』pp. 77~80 昭和53年 熊本日日新聞社 旨く行かなかつた)。ジェーンズの、熊本の、農に、関わる事歴、『生産初歩』の出版(明治6年夏 山崎為徳他二人の洋学校生徒翻訳)や、それに関連する竹崎律次郎(茶堂)(徳富蘇峰の母・久子の姉・順子の夫君 熊本での殖産先駆者)の耕耘社(同6年3月発足)や耕植試験場については『白川新聞』第五号(明治7年10月)の四~八面の記事及び、前掲、『熊本回想』pp. 169~171の上田穰一解説参照。小説ではあるが徳富健次郎(蘆花)の『竹崎順子』pp. 219~222(大正12年 福永書店)にも、この事や、ジェーンズの勸奨による絹織物の殖産の事等が描写されている。

(22) 横井(万延元~昭和2年)とジェーンズの関係は山田龍雄・L・L・ゼーンズと横井時敬博士『農村研究』第33・34合併号72年参照。横井が基督教に傾かなかつた等々の事が分析されている。東京農業大学を育て上げた初代学長である。

(23) 折田(嘉永3~大正9年、権蔵とも)は薩摩藩出身。College of New Jersey(一八九六年にPrinceton Universityと改称)を

卒業して帰国後、文部省出仕、明治13年に大阪専門学校長となり、その後旧制三中・三高（明治19年4月～27年9月は第三高等中学校 その間 22年9月に大阪より京都へ移転 27年9月以後は第三高等学校 昭和24年新制京都大学の一部となる 但 昭和25年4月迄存続）の名校長（明治20～43年）と敬慕された教育者で、三高の自由の学風は彼によるものとされている。

ジェーンズが再来日して三中・三高で英語学教師として雇庸契約を結ぶ時の校長が折田である（明治26年8月～同28年7月及び同30年8月～32年7月の二度で その間の空白期間には鹿兒島尋常中学校造士館英語教師 前掲石井 pp.192～229）。折田は明治9年10月帰国迄の七年間の留学中に、米國文明の基礎は基督教にあるとして、新島同様、深く研究し接していたが受洗には深い思いと慎重さがあって意外に遅く、卒業一ヶ月前で帰国五ヶ月前の同9年5月28日、とされている。ジェーンズと同じ長老派教会（Presbyterian church）での事である。彼は宗教は信念の事として個人として活動はしても公（教育）の面では表に出さず、教育者として終始している。この点、宗教家（準宣教師）・新島とは大きく異つていとされている（板倉創造『一枚の肖像画』p.131 平成5年 三高同窓会）。この事について、嚴平（Yan Ping）『三高の見果てぬ夢』p.61（08年 思文閣出版）では「官立学校の校長という社会的地位に由来する抑制の原理が働いて…」という見方をしている（この書には事実の誤認が散見されるのは残念である）。

折田と新島は基督教に対しての認識を共有しており、米國留学中、森有礼を介して相識る仲であり、米國でリベラル・アーツのカレッジ教育を受けた存在として教育に対して共通の思いがあった、としてよい。新島は明治22年9月11日の、三中の京都移転開校式典に出席している（前掲 板倉 p.94）。同9月26日夜には「第三高等中学校之教授一同ヲ招キ図書館（註 書籍館＝現有終館）ニ於而懇親会ヲ相開申候処皆々満足ノ体ニ而被帰将来も親しく交通之途を相開申置候」（『新島襄全集』4 p.210）とある。ジェーンズが再来日して三中の教師になる（26年8月）前の事である。以上は折田校長（の三中）に対する、新島の関係を示す例として記しておく（前掲 板倉 pp.95～96）。

折田とジェーンズの関係については「折田先生と日本の基督者達」（前掲 板倉 pp.206～218）参照。

新島の死（明治23年1月23日）の後、ジェーンズが三中教師として京都に居るので、彼の、同志社での基督教についての講演会が三回（同26年10月21日、12月2日、12月9日）行われている。熊本での成果の伝説の人の講演という事で同志社の公会堂（チャペル）は大盛況だった、と伝えられている。彼は社会の多くの面での繁栄の平等性（社会改革への現世的関心）の源泉として基督教はあるべきとし、既成の基督教団や宣教のあり方を激烈に批判したのである。宮川経輝はジェーンズを批判し、同志社内に

物議をかもし、第四回の講演（12月16日予定）は中止となっている（以上 フレッド・G・ノートヘルファー＝Fred G. Noteheller『アメリカのサムライ L・L・ジェーンズ大尉と日本』飛鳥井雅道訳、91年 法政大学出版局、第十一章より）。ジェーンズの、この思念は彼の教え子達に伝わっている、いえるのではないだろうか。

彼の基督教に対する思いの変化である。

〔24〕明治5年8月の「学制頒布」によって教育が国の統一支配下に置かれ、この支配に適合していない洋学校が、いずれ、廃校に至る運命にある事は杉井論考によって分析されている（『バンド研究』pp.85～97）。

